

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第114集

生茨沢遺跡

平成10年度 東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第114集

生茨沢遺跡

平成10年度 東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



旧石器時代遺物出土状況



旧石器時代石器（BB VI層直上）

序

平成4年度より開始した当研究所の東駿河湾環状道路の調査も7年の歳月を重ね、調査遺跡も15を数えようとしている。

今回の生茨沢遺跡の調査においては、旧石器時代の遺物としては後期旧石器時代初頭のものと考えられる石器ブロックが検出された。これは当地域では最古の石器群に属し、愛嵐山麓の土手上遺跡で検出されたような環状ブロックを非日常的なものと解釈すれば、当遺跡のそれは一般的な石器製作跡と捉えることができる。またこの石器群は発達したスクレイパー類を持ち、従来より知られていた後期旧石器時代初頭の石器組成とは異なった様相を示す。遺物が出土した場所も谷頭であり、非常に学術的興味が深い。

古墳時代では、古墳時代後期の横穴式石室を調査し、石室の中からは太刀・刀子・鎌等の鉄製品の副葬品が出土した。調査前に石室が露出していたこともあり、保存状態が良好でなかったことが残念であるが、東駿河湾環状道路の調査では、初の古墳の調査が行われたことは大きな意義があった。伊豆地方は横穴を除く古墳は數少なく、また、調査報告事例も少ないこともあり、今回の調査が今後の研究の進展の一助となることを希望する。

最後に、東駿河湾環状道路関係の調査にあたっては、建設省をはじめとした関係機関各位に多大なる援助・協力を受けており、本書もまた例外ではない。長年にわたるご好意に対し、厚く御礼申し上げるとともに、今後の調査においてもあたたかい理解と協力の継続をお願いしたい。また、与えられた条件下で最善を尽してくれた、現地調査・資料整理に参加した多くの調査員・作業員の健闘を称えたい。

平成11年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

- 1 本書は静岡県三島市竹倉348に所在する生茨沢遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は平成8年度、9年度に実施した第1次調査（確認調査）の結果を受け、平成9年度、平成10年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、建設省中部建設局沼津工事事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成10年1月から同年6月まで現地調査を実施した。
- 3 生茨沢遺跡の資料整理は、平成10年7月から8月まで実施した。
- 4 調査体制は以下のとおりである。

平成8年度（確認調査）

所長 斎藤 忠、副所長 池谷和三、常務理事 三村田昌昭、調査研究部長 小崎章男、
調査研究4課長 橋本敬之、調査研究員 望月由佳子、井鍋誉之

平成9年度（確認調査・本格的調査）

所長 斎藤 忠、副所長 池谷和三、常務理事 三村田昌昭、調査研究部長 石垣英夫、
調査研究4課長 橋本敬之、調査研究員 佐野暢彦 井上 隆

平成10年度（本格的調査・資料整理）

所長 斎藤 忠、副所長 池谷和三、常務理事 三村田昌昭、調査研究部長 石垣英夫、
調査研究1課長 佐野五十三、調査研究員 佐野暢彦（至6月） 笹原千賀子

- 5 作業の迅速化を図るため、石器の実測用写真を（株）シン技術コンサルに委託した。
- 6 調査では以下の方々、団体に御指導、御助言を賜った。厚くお礼申し上げる。（敬称略）
上杉 陽（火山灰） 望月明彦（黒耀石原産地） 三島市教育委員会 沼津市教育委員会
- 7 本書の作成、執筆は職員が分担しておこなった。執筆分担は日次に（　）で示した。
- 8 発掘調査資料は、全て静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
- 9 本書の編集は静岡県埋蔵文化財調査研究所がおこなった。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 調査区の方眼設定は、国家座標(平面直角座標第Ⅳ系)の軸線を基準に、国家座標(-97550, 41040)=(A, 0)と設定した。
- 2 鉄製品・石器の実測は原則として第三角投影法で行った。
- 3 採図中の図面の縮尺は、スケールを付して示し、図面は原則として北方向を上としている。
- 4 土層・土器の色調は、新版『標準土色調』(農林水産技術会議事務局監修 1992)を使用した。
- 5 本文中の遺構・遺物に関する表記は以下のとおりである。

層　　名	
K u	栗色土層
F B a	富士黒土層 a
F B b	富士黒土層 b
Y L u	休場層上層
Y L m	休場層中層
Y L l	休場層下層
B B O	休場層底下黒色帶
S C I	第Ⅰスコリア層
B B I	第Ⅰ黒色帶
N L a	ニセローム a
N L b	ニセローム b
B B II	第Ⅱ黒色帶
S C II	第Ⅱスコリア層
B B III	第Ⅲ黒色帶
S C III s 1	第Ⅲスコリア帯スコリア1
S C III b 1	第Ⅲスコリア帯黒色帶1
S C III s 4	第Ⅲスコリア帯スコリア4
B B IV	第Ⅳ黒色帶
B B V	第Ⅴ黒色帶
B B VI	第Ⅵ黒色帶

岩石和名	岩石英名	略号	黒耀石 原産地
ガラス質黒色安山岩	Glassy-Black-Andesite	GAn	柏峰 K S W
ホルンフェルス	Hornfels	Hor	攀科系 T T S
安山岩質溶岩	Andesitic-Lava	La (An)	
安山斑岩	Andesitic-Porphyry	AnP	
輝石安山岩	Pyroxene-Andesite	An(Py)	造 物
玉髓	Chalcedony	Cha	微細割離痕 *****
黒曜石	Obsidian	Ob	木質部
細粒安山岩	Fine-Grain-Andesite	FAn	
石英	Quartz	Qi	

目 次

著者序	
序	
例言	
凡例	
第Ⅰ章 調査の概要 (笠原)	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の經過	4
第Ⅱ章 遺跡の概要	
第1節 地理的歴史的環境 (笠原・栗本)	5
第2節 墓主層と遺跡の土層堆積状況 (笠原)	8
第Ⅲ章 遺構と遺物	
第1節 中近世の遺構 (笠原)	12
第2節 古墳時代の遺構と遺物 (栗本)	12
1 生灰瓦1分層	
2 出土遺物	
第3節 旧石器時代の遺構と遺物 (笠原)	23
1 遺物出土状況と遺構	
2 出土遺物	
第Ⅳ章 まとめ	44
石器一覧表	
写真図版	

挿図目次

第1図 黒耀石产地別図	2	第19図 遺物出土状況図	24
第2図 周辺の地形とグリッド配像図	3	第20図 遺物分布図1（石軸溜）	26
第3図 周辺の遺跡1（旧石器）	6	第21図 遺物分布図2（個体別）	27
第4図 周辺の遺跡2（古墳）	7	第22図 遺物分布図3（個体別）	28
第5図 遺跡の土層堆積状況	9	第23図 遺物分布図4（個体別）	29
第6図 土壘柱状図1	10	第24図 台形様石器	32
第7図 土壘柱状図2	11	第25図 台形様石器・ナイフ肩石器	
第8図 中近世土坑分布図	13	スクレイバー	33
第9図 中近世土坑実測図	13	第26図 スクレイバー	34
第10図 古墳と周辺の地形	14	第27図 楕円石器・二次加工剝片	35
第11図 石室展開図	15	第28図 使用痕剥片1	36
第12図 石室内平面図	17	第29図 使用痕剥片2	37
第13図 草編実測図	18	第30図 石核	38
第14図 遺物出土状況図	19	第31図 石核・敲石・台石	39
第15図 鉄製品実測図1	20	第32図 接合資料1	40
第16図 鉄製品実測図2	21	第33図 接合資料2	41
第17図 土器実測図	22	第34図 接合資料3	42
第18図 旧石器時代の剖面動向と地形模式図	23	第35図 接合資料4	43

挿表目次

表1 土器表	4
表2 個体別資料分類表	25
表3 個体別資料と器種	25
表4 碓計測表	26
表5 石器計測表	29
表6 石器一覧表	46

写真図版目次

図版1 駿河区遠景 墓場と周辺	図版4 石器ブロック 配石
図版2 石室検出状況	石器ブロック遠景
図版3 遺構出土土土器 須恵器（环身） 鉄錆	図版5 台形様石器・スクレイバー 使用痕剥片
刀子・小刀・太刀・鉄	石核

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

静岡県東部、三島・沼津地域は、古くから東海道の東西交通の重要な結節点であるとともに、富士・箱根・伊豆といった日本で有数の観光地を控え、この地域の年間入客数は、7000万人にも昇っている。また首都100km圏に位置し先端技術をはじめとする関連産業の開発が進み、可能性豊かな地域として近年注目されてきている。これと同時に市街地を横断する国道は慢性的な渋滞に悩まされ、市民生活にも重大な影響を及ぼしている。東駿河湾環状道路はこのような渋滞を緩和するために計画された高規格幹線道路で、三島・沼津山街地をさけ、国道1号線、国道246バイパス、熱海函南線を環状に結ぶ、沼津市岡宮へ函南町平井間の約15kmである。

一方、道路建設計画が進むと共に対象地域の埋蔵文化財包含地の調査も行われてきた。路線範囲となる各市町村教育委員会は平成2年に路線内の埋蔵文化財包含地の調査を行い30箇所の周知の遺跡および遺跡の可能性がある地点がリストアップされた。それを受け平成3年、静岡県教育委員会文化課、三島市教育委員会、当研究所の3者によって現地踏査がおこなわれた。その後この3者の協議の上、東駿河湾環状道路内の遺跡分について、発掘調査実施機関に当研究所、指導機関に静岡県教育委員会文化課が当たることとなった。

生茨沢遺跡は、平成8年と平成9年に確認調査を実施し、古墳1基と縄文・旧石器時代の遺物の検出をみたため、本調査の必要を委託者である建設省中部建設局沼津工事事務所、指導機関である静岡県教育委員会に回答し、平成10年に本格的調査を実施した。

第2節 調査の方法

1 現地調査

遺跡全体を把握するために、国家座標(X, Y) = (-97550.00, 41040.00) 上を原点A0とし、遺跡全体に10mの方眼を設定してグリッドとした。またA0座標を仮に(X, Y) = (0, 0) とし、遺物の位置を示すために用いた。これらは全て地理座標に準じているため、南北方向にX軸を、東西方向にY軸をとっている。

調査は、全体を2区に分割して行われた。1区は斜面地であり、耕作土の下は中部ローム層が露出していたために、古墳を想定して等高線に沿った形のトレンチを10m幅で設定して行われた。この結果古墳が1基検出された。2区は確認調査時に遺物が出土していた富士黒土層の上面まで重機によってスキ取り、富士黒土層の上面で中近世の土坑を検出した。この時点で遺跡が埋没谷の中心に位置していることが判明したため、谷へ落ち込む稜線上にトレンチを設定し掘削したが、遺構は検出されなかった。引き続いてトレンチ内にテストピットを設定し、上部ローム層の文化層確認をしたが、遺物の検出がなかたため、確認調査で遺物を検出していたテストピットの周辺を重機によってSCIII層まで掘削し、以下精査を実施した。また当遺跡ではSCIII層以下の堆積が不明瞭であったために、都留文科大学教授上杉陽先生に火山灰の同定を依頼している。

現地での遺物の取り上げは光波測定器を用い、遺物には通し番号を付し、X、Yの座標と標高(H)の記録とともにコンピューターに保管した。また遺構、碑の出土状況、土層堆積状況は原則的に1/20の図面によって保管している。

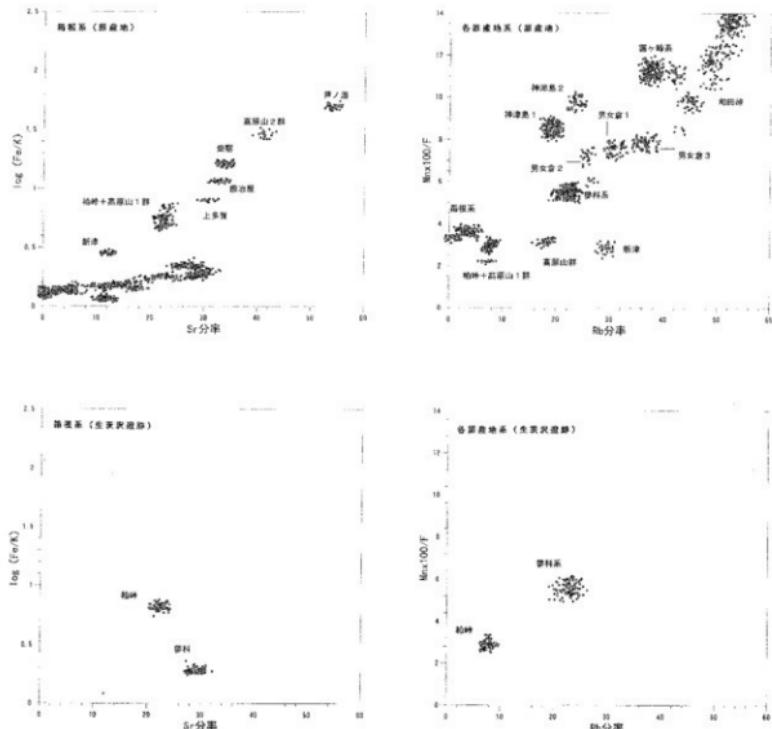
写真撮影は、中型カメラ（6×7）1台、小型カメラ（35mm）3台を使用した。

2 資料整理

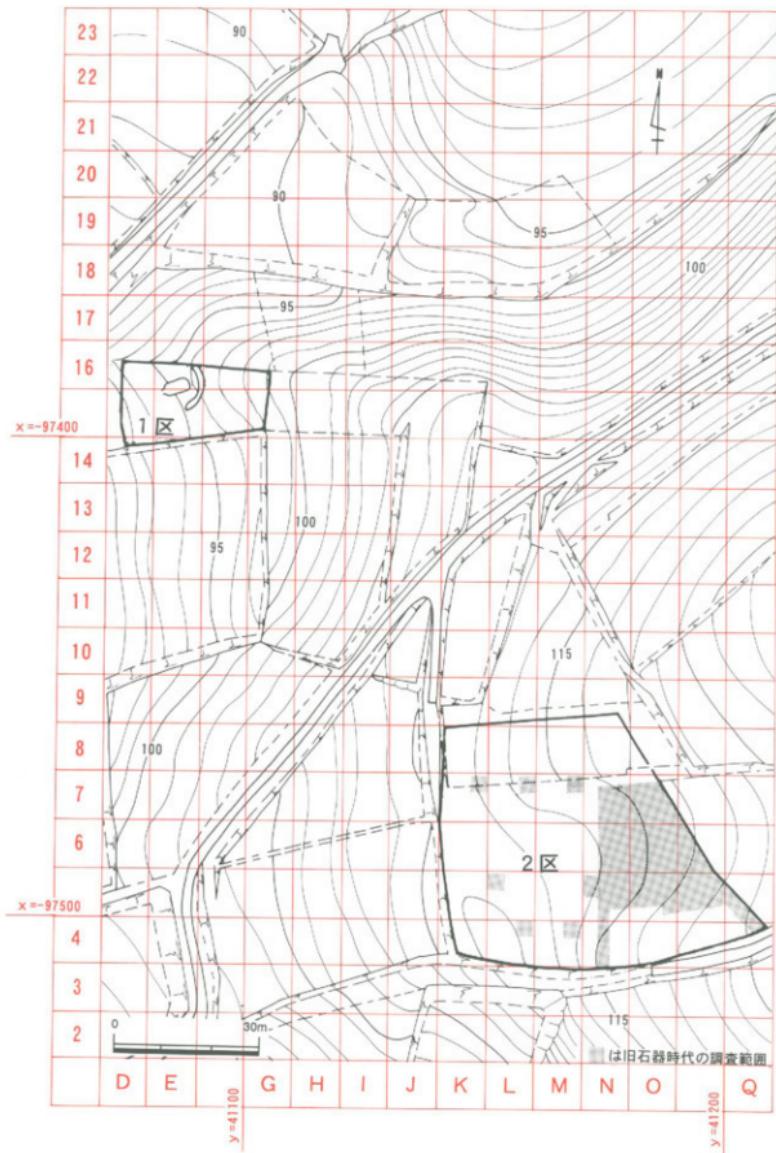
資料整理は2ヶ月間おこなわれた。出土遺物の内訳は須恵器15点、鉄製品23点、石器210点である。本書には担当調査員の責任において抽出した遺物を図化し掲載した。また期間短縮を目的として石器の実測用写真を（株）シン技術コンサルに委託した。

本書で使用している遺物の分布図と等高線図は、現地で光波測定器によって測量したデータを、カード型データーベースで管理し、グラフソフトで図化したものである。

旧石器時代の遺物の個体別分類は、黒耀石については蛍光X線による産地同定をおこなった後に、そのデータを元にして肉眼下でおこなっている。また、黒耀石以外の石材についてもやはり肉眼による分類をおこなった。なお黒耀石の産地同定については国立沼津工業高等専門学校助教授、望月明彦氏に依頼しておこなった。対象となった資料は最大長5mm以上のもので、分析にはセイコー電子工業社製半上型エネルギー分散蛍光X線分析装置SEA2110Lを用いた。分析結果は巻末に、また産地同定に用いた判別図は以下に図示した。



第1図 黒耀石産地判別図



第2図 周辺の地形とグリッド配置図

第3節 調査の経過

確認調査は、用地買収の進捗状況に合わせて、平成8年4月～5月、平成9年11月～12月の2度に分けて行った。

また本格的調査はこの確認調査の結果を受けて平成10年1月～6月、資料整理は平成10年7月～8月まで行った。

平成10年1月より開始した1区の古墳の調査は、1月26日残存していた天井石の一部を除去した。床面からは、太刀、刀子、鐵鎌が出土した。太刀については鏽による側壁への接着が著しく取り上げが困難であったため、発砲ウェタンによって保護し、側壁の石の一部と共に取り上げた。

3月10日、石室内の実測を終了し、掘り方、周溝の実測を行った後、3月16日埋め戻して古墳部分の調査を終了した。

2区の調査は4月より開始した。重機によって表土を削除したのち、中近世の土坑を検出すると同時に下層の範囲確認のためにテストピットを掘削した。5月下旬に約2週間をかけて中間層を重機によって除去し、SCIII層4下層を6月より精査しはじめた。この結果、石器ブロックが1基検出され、この石器ブロックを取り囲むように、幼児の頭大の配石が検出された。6月16日より、遺物の取り上げ作業を行い、石器ブロックの写真撮影、土層の実測、旧地形の地形測を終了した後、6月18日より更にテストピットを設定して、中部ローム層まで掘削したが、遺物・遺構の出土は見られなかった。6月24日掘削作業を終了し、現地プレハブ等の撤収を開始した。その中で6月30日、都留文科大学教授 上杉陽氏による火山灰の現地指導を受け、今回検出した石器ブロックが、後期旧石器時代初頭のものであることを確認した。同日より重機による埋め戻し作業を開始し、7月8日終了後、建設省に現地の引き渡しを行った。

なお、古墳から出土した鉄製品については、清水整理事務所において鏽落としのためのクリーニングと保存処理を現地調査、資料整理と並行して行っている。



古墳の調査



測量作業



上杉氏現地指導

表1 工程表

	H 8		H 9		H 10							
	4月	5月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
確認調査												
本格的調査												
資料整理												

第II章 遺跡の概要

第1節 地理的歴史的環境

生茨沢遺跡は三島市街地の東方に位置し、箱根外輪山の西麓に形成された丘陵端部に位置している。

箱根西麓の丘陵は、箱根古期外輪山が箱根山第3期の活動に伴う火碎流堆積物によって覆われ、さらに、富士火山の降灰が広く堆積して形成されたものであり、東麓に比して緩やかな傾斜を見せる。その斜面を境川、沢地川、山田川、来光川といった河川が南西方向に流れ、大場川、狩野川に注いで駿河湾に至る。丘陵部の小地形は著しい浸食作用により形成された小文谷群の中に浮かぶ痩せ尾根となり、その末端部は小尾根を八手状に分岐する入組んだ地形を呈する。

本遺跡もその例に反せず、山田川と夏梅木川に挟まれ、丘陵が浸食を受けて形成された痩せ尾根の西側斜面に位置する。付近の地形は西側斜面が尾根状に緩やかに突出する所であり、標高は約90mから120mにあたる。

当遺跡では、地点を越えて古墳時代後期の遺構と旧石器時代の遺構が検出されている。そこでそれぞれの時代のこの地域の遺跡について以下に簡単に述べた。

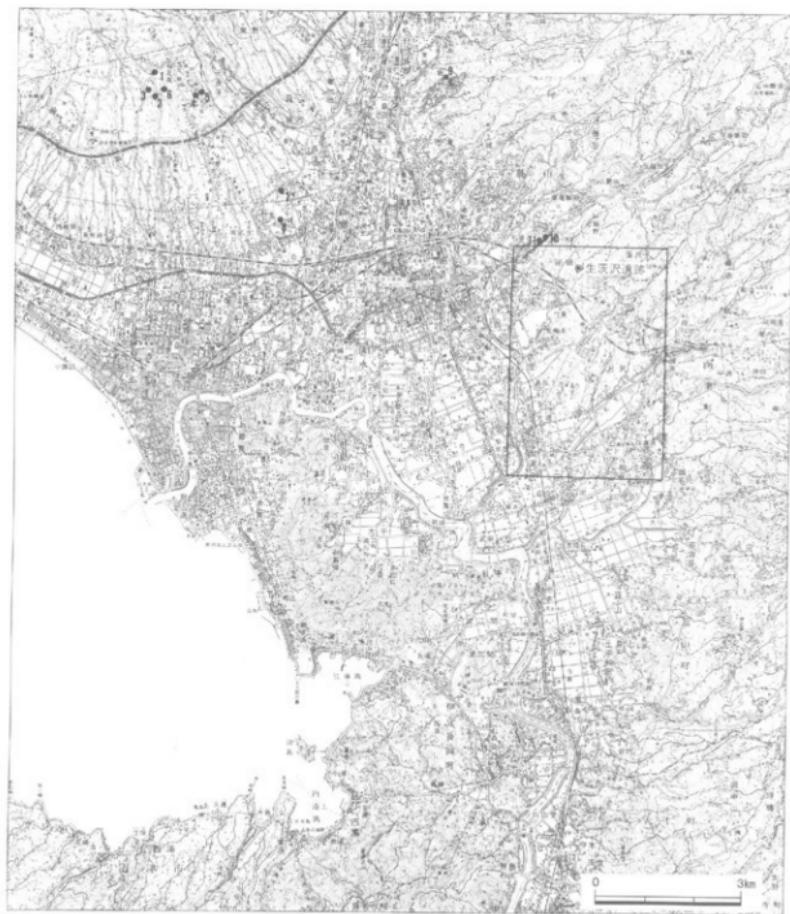
〈旧石器時代〉

当該期遺跡は箱根西麓だけでも50遺跡、愛鷹山麓をあわせると100を越える遺跡がすでに調査されている。しかし当遺跡で石器ブロックが検出された時期（愛鷹・箱根山麓編年第I期）の石器群の出土例は、現在把握されているもので箱根山麓の初音ヶ原A遺跡第1地点、第5地点のBBIV～V層、佐野片平山G遺跡、愛鷹山山麓の中見代第1遺跡BBV層、BBVI層、上手上遺跡BBVI～IV層、清水柳北遺跡東尾根BBV層、三明守遺跡BBV層、二ツ洞遺跡BBIV層のみである。これらは台形様石器を主体とする石器群であり、石斧や搔器、削器を伴う。遺物の分布は環状ブロックを形成するような大規模なものと、当遺跡のような石器制作跡を示すような単独のブロックのものと2種類があるようである。これらの石器群は、丘陵上の平坦地に営まれているが、当遺跡では谷の底部の僅かな平坦地に石器群が残されていた。

〈古墳時代〉

山田川と来光川に挟まれた丘陵地帯は、古墳時代の墳墓が箱根西麓でもっとも濃密に確認される地域であり、方形周溝墓群、後期古墳群、横穴群など各期にわたる。特に夏梅木川対岸にある田頭山丘陵の向山古墳群、夏梅木古墳群、赤玉山古墳群などが著名である。今回発掘した古墳周辺も古墳群が存在したことが地元の方々からの聞き取りによって知ることができた。しかし、多くが開墾時に破壊されたようであり、そのひとつでは鉄製の太刀のようなものが見つかったと聞いている。1区の南方は土取りによる削平を受けているようだが、今回未調査のため、遺構の残存する可能性を残す。また、西向かい側の尾根にも古墳が存在したが土取りによる削平により消失したらしい。

本遺跡の南東約500mには小平古墳群、乙石古墳が確認され、横穴式石室を主体部とした後期群集墳と考えられる。また、かつての山田川により形成された本遺跡の北方より南西に広がる小崩状地上には塚原古墳群、塚畠毛古墳群が確認されている。当地は箱根西麓の丘陵部中でも比較的の平坦であり、東海道という交通の大動脈が存在したことによって、早くから開発が行われ、そのため、多くの古墳が開墾により消滅したのではないかと考えられる。



番号	遺跡名	遺物出土層位	文獻
1	土手上遺跡	BB IV・V・VI	高尾好之1987『広合遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書41
2	中見代第Ⅰ遺跡	BB V・VI	高尾好之1988『中見代第Ⅰ遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書42
3	中見代第Ⅱ遺跡	BB VII	高尾好之1988『土手上・中見代第Ⅱ・第三遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書43
4	清水柳北遺跡中央尾根	BB VI	関野哲夫1989・1990『清水柳北遺跡発掘調査報告書その1・その2』沼津市文化財調査報告書47・48
5	清水柳北遺跡東尾根	BB V	関野哲夫1989・1990『清水柳北遺跡発掘調査報告書その1・その2』沼津市文化財調査報告書47・48
6	二ツ洞遺跡	BB IV・V	池谷信之1991『広合遺跡（e区）・二ツ洞遺跡（a区）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書52
7	子の神遺跡	BB VII	石川治夫1982『子の神・大谷津・山崎Ⅱ・丸尾Ⅱ』沼津市文化財調査報告書27
8	三明寺遺跡	BB V	
9	佐野片平山G遺跡	BB IV～	秋本真澄1990『伊豆佐野遺跡群発掘調査』『三島市文化財年報2』
10	初音ヶ原A遺跡第1地点	BB IV～	高尾好之1995『第1群の石器群』『愛媛・箱根山麓の旧石器時代縄年 予稿集』静岡県考古学会
11	初音ヶ原A遺跡第5地点	BB IV～	鈴木敏中1994『初音ヶ原A遺跡第5地点』『三島市文化財年報第6号』

第3図 周辺の遺跡 1 (旧石器)



第4図 周辺の遺跡2(古墳) 明治20年測量「三島宿」・「赤王山古墳群」1998参考

第2節 基本土層と遺跡の土層堆積状況

遺跡は斜面上に位置し、特に旧石器時代の石器ブロックを検出した2区は壠鉢状の谷の底部にあたる。よって典型的な谷堆積の様相を示しており、第IIIスコリア帶以下では地下水の影響と考えられる土壤の変化がおこっており、粘土化しているのが特徴である。ここでは特にこの2区の土層堆積状況について述べたい。

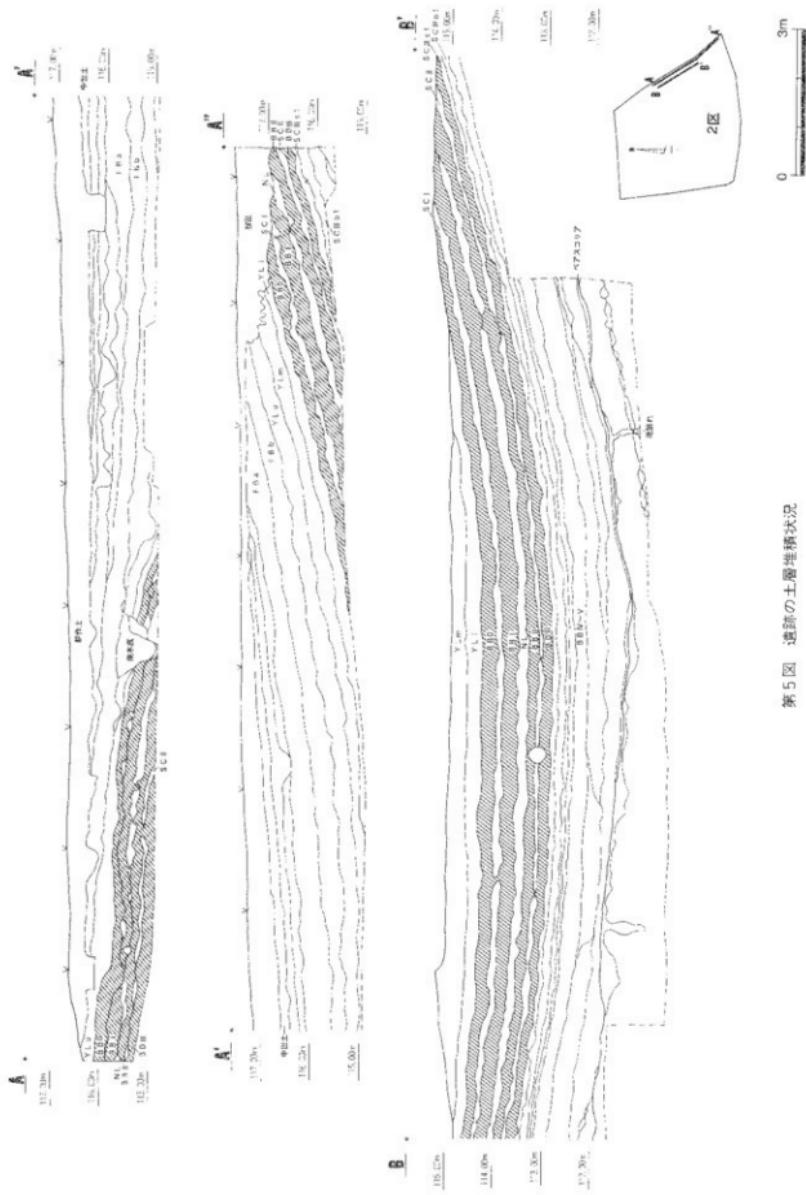
2区は第5図が示すように谷地形を呈しており、愛鷹、富士、箱根よりもたらされた火山灰が厚く堆積している。これらは古富士火山後期の活動に由来し、大量のスコリアを含む。今回の調査では都留文科大学教授、上杉 陽氏に現地指導をお願いし、土層柱状図を作成していただいた（第6・7図）。目的は各層位に含まれるテフラの番号を明確にし、特に石器出土層の由来を正確にとらえることにある。この結果、地滑りに拠る不整合や地割れをおこしている状況も同時に指摘された。詳細は第6・7図を参照してもらうとして、以下に基本土層の概要を述べる。

表土は畑作と客土が繰り返されている。1層は中世土と考えられているもので、本遺跡では直徑約1mの円形土坑が検出されている。7層まではいわゆる新富士火山を起源としたもので、6層には大沢スコリアが含まれる。

8層からは古富士火山を起源とした火山灰の堆積層となる。8~14層では調査者の所見と上杉氏の分析結果の間に若干の相違が生じている。特に富士黒土層(FB層)から休場層(YL層)については黒色帯の発達(色調)とスコリアの含有量によって調査者は分層してきたが、今回を含めた過去3遺跡の現地指導でも色調による土層の分層は大変危険であるという指摘をうけた。これは尾根ごとに土壤の発色が異なり、火山灰の堆積状況も異なるためである。本遺跡では該当する層序からは遺物が出土していないが、遺物が出土した場合慎重な検討が必要となる。

14層以下は黒色帯と暗黄褐色のスコリア質土との互層となる。17層はこの地域でニセロームと呼ばれるもので始良・丹沢広域火山灰を含む。遺跡では内眼でも直徑1cmほどのバッチ状にATを確認できる。当遺跡の北西に位置する下原遺跡は、スコリアの多少でニセロームを2枚に分層する事ができる。20層~24層までを第IIIスコリア帶(SCIII層)と呼んでいる。24層は第III黒色帯スコリア4と呼ばれており、非常に多いスコリアの集積層である。この24層では部分的に地滑りが発生し不整合面がでている。以下愛鷹山麓では3枚から4枚の黒色帯がスコリア層と互層になって確認できるが、箱根山麓では黒色の発達が弱く、これを分層するスコリア層が確認できない。また層厚も愛鷹山麓に比べ薄いため、25層から28層はBBIV~BBVII層相当として一括している。当遺跡では特に25層以下は粘性土に変化しており(地下水による影響か)、酸化鉄の付着が著しく、一見した印象はかなり愛鷹山麓と異なる。これは火山灰の供給源に比例している。また35層では著しい地割れが発生しており、噴砂現象も確認できる。

遺物が出土した28層直上はY番号によるとY-107直上ということになり、上杉氏がおこなった沼津市三明寺遺跡のテフラ分析の結果から見ると第VI黒色帯直上ということになる。遺物的にも台形様石器を主体としたものなので対応すると考えられる。色調は黒褐色で粘性土である。32層はペアスコリアを含む。

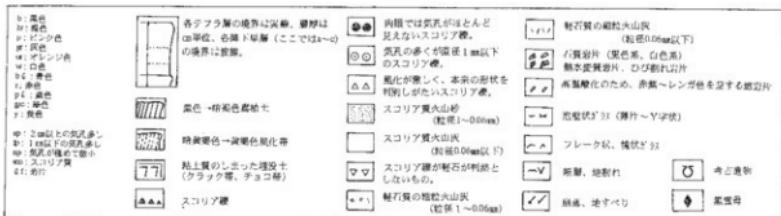


第5図 造詣の土層性構況

土層番号	層厚	層相	基本土層名	推定テフラ番号	内臓の諸特徴など	年代	相模野 基本土層名
(0)	30				埋土 ロームを夾き認められる。		
(1)	5			S-24-9~10~S-25期	いわゆる中生土、黄褐色で腐植質少ない。		
(2)	20			S-24-8	ガラス混入、褐褐色土 D.sco.~br.sco.(7~3)		
(3)	10			S-24-6~7	D.fp.sco.(15土) 壤色や粘質	12000bp~	
(4)	5			S-24-3~5	r.sco.(7土) 褐色砂質	12800bp~	
(5)	20			S-22~	r.sco.(1土) rich	22000bp~	
(6)	7	☆		S-15	ガラスrich oc.~np.sco.(15土, 10~7)	25000bp~	
(7)	20			S-10~14	墨汁をかけたように黒味強し。 r.sco.~r.or.sco.(3土)	31500bp~	
(8)	60	FBa	Y-141-2	r.p.0.0f(1=)	茶褐色の しまった土壤	11200bp ↓ 11700bp	F8u F8l
(9)	30	FBb	Y-141-1 Y-140?	br.~r.br.sco.(7~8)	暗黒褐色ふかふか		
(10)	50	YLu	Y-137	r.oc.(5土) r.oc~br,np.sco.(10~0)	暗褐色土		L1s
(11)	30	YLn	Y-136 Y-132	熱水石片(10土) 赤褐色スコリア(7土)	暗赤褐色 ローム ふかふか しまる	14000bp ↓ 18000?	L1H B1
(12)	25	YLi	Y-131?	黒チョコ色~赤褐色チョコ(20~10)			
(13)	30		Y-130	r.oc.fp.sco.(7土)	17600土		
(14)	15	SC I	ccp-16 Y-129~127	黒チョコ色sco.(20土) w.pm.(3土) r.oc.fp.sco.(7土)			L1
(15)	30		Y-126	細弱土 oc.~p.fp.sco.(7~5)	18000?		
(16)	15	BB I	Y-121	b.~r.br.fp.(7土) b.fp.sco.(5土)			B2
(17)	20	NL	Y-117~128	y.w. glossy	24500土		L2
(18)	10	BB II	Y-116~115	0.0f(5土)			B3
(19)	10	SC II	Y-114	r.br.sco.(10~5)	26000土		
(20)	10	BB層	Y-113	r.br.sco.(5土)			
(21)	21	SC III s1	Y-112	r.br.sco.(5土)			
(22)	15	SC III b1	Y-111	b.0.0f(5土)			
(23)	10		Y-110	r.br.sco.(10~5)			
(24)	20	SC III s+	Y-110 Y-109 ccp-12	b,np.~fp.sco.(7土) r.br.sp.sco.(20~10)			
(25)	30		Y-108~mf	w.pm~w.0f(10土) すれり発生	29000土		
(26)	30		Y-108~	b.0.w.0f(5土) b.チョコfp.sco.(10土)			

第6図 土層柱状図1

土層番号	層厚	層相	基本土層名	推定テフラ番号	内證の諸特徴など
(27)	40 5		BBV	Y-108 ccp-11	b. t. g. sco. (10~5) b. blue. & f (10~5) 砂礫土
(28)	20		BBV	Y-107	r. br. sco. (20, 10~5)
(29)	20 10 7		ccp-10	Y-106	w. & f. (5土) → 離散系
					r. br. sco. (5土)
(30)	25		Y-105 Y-104	b. np. - fp. sco. (3土) YL流 r. hr. sco. (3~1)	堆積場所
(31)	5			w. pm. (5~10)	
(32)	25		ペアスコリア	Y-103	3層有る or. fp. - nf. sco. (7土)
(33)	25		Y-102?	Y-102? 103?	堆積面 ccp-7? clr. ~ y. sco. (10土)
					ロームブロック エタキタに風化している。 Y-101?
(34)	100		ccp-7?	w~y. pm. (30~20)	
(35)	10		ccp-4 (ムユゲ)	w. gr. pm. (10土)	
(36)	25		Y-91 Y-90	w. gr. clayey tubb	
(37)	20		Y-89	b~r. br. sco. (5~1) b. & f. (30土)	
			Y-87	w. gr. pm. tubb r. br. sco. (10~5)	
(38)	40			w. b. & f. (15土)	
(39)	50			w. grey pm. tubb	
(40)	10		ccp-3?	r. sco. (5~1) こりこり	地割れ発生
(41)	60		Y-86?	w. pm~or. pm (30~20)	



第7図 土層柱状図2

第III章 遺構と遺物

第1節 中近世の遺構

表土除去をした段階で、2層に掘り込んだ状態の7基の円形土坑を検出した。7号土坑を除いて残存状況は悪く、覆土は10cm前後残るのみであるが、いずれもほぼ均質であり、自然堆積というよりも人为的に埋め戻された可能性が強い。遺物は出土しなかった。土坑の帰属時期は覆土より、中世～近世という広い範囲でとらえたい。

第2節 古墳時代の遺構と遺物

1 生茨沢1号墳

1区で検出された遺構は古墳1基のみであり、その他の遺構はまったく確認できなかった。以後この古墳を生茨沢1号墳と呼称する。生茨沢1号墳は、箱根西麓より連なる丘陵が浸食を受けて形成された複数尾根の西側斜面に位置する。付近の地形は西側斜面が尾根状に緩やかに突出する所である。

調査前の状況は、丘陵の西側斜面に開墾された畠地の中に小さな香木林に開まれていたために付近で耕作を営む方々以外には知られざる古墳であった。墳丘は、完全に失われており、伐採、浮石表土層を除去した時点で石室、墓壙、周溝を確認することができた。

本墳の主体部は、斜面方向に軸をもち、西側に向かって開口する横穴式石室である。石室は地山まで掘り込まれ、墓壙内に築かれた無袖式のものである。石室の主軸方位はN-77-Eを示す。

〈石室〉

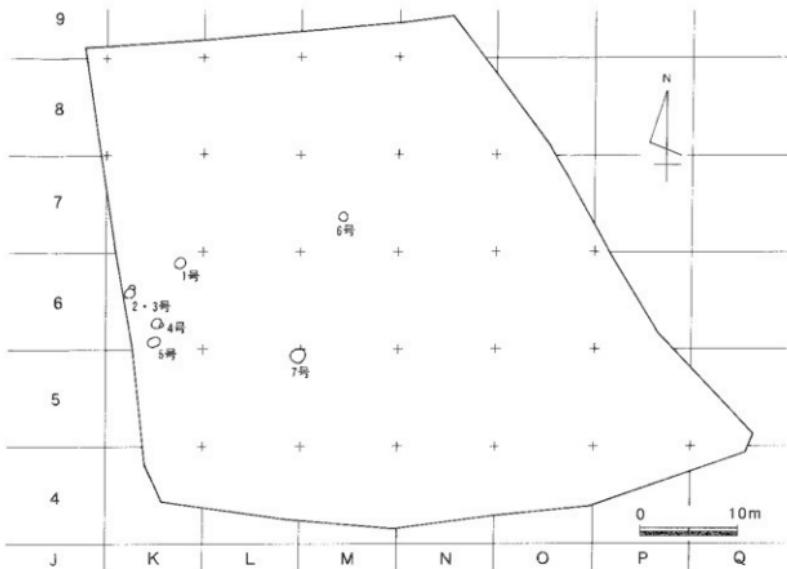
石室は平面上では狭長な長方形を呈し、法景は内法で全長498cm(閉塞部まで348cm)、幅139cm、高さは残存値で112cmを測る。奥壁は1枚の板状の石材(縦129cm、横154cm、厚さ29cm)を直立させて据え付けている。側壁は、崩落している部分が多く、明確ではないが、縱方向の目地を通すように石積みがなされているようであり、石室の横軸方向に長軸を示す石が多い。基礎は主に70cm前後の石材が使用され、底面積の狭い立てた状態で据え付けているものが多く、一部に石室の横軸方向に長軸を示す石が見られる。いずれも壁面として表出する面は平滑な面を使用している。また、各石の隙間に小石が補填されている。

天井石は石室が露出していたこともあり、築造時の位置を保っているものは存在しなかった。残存していた天井石のうち最大のもので長軸164cm、短軸114cm、厚さ52cmを測る。

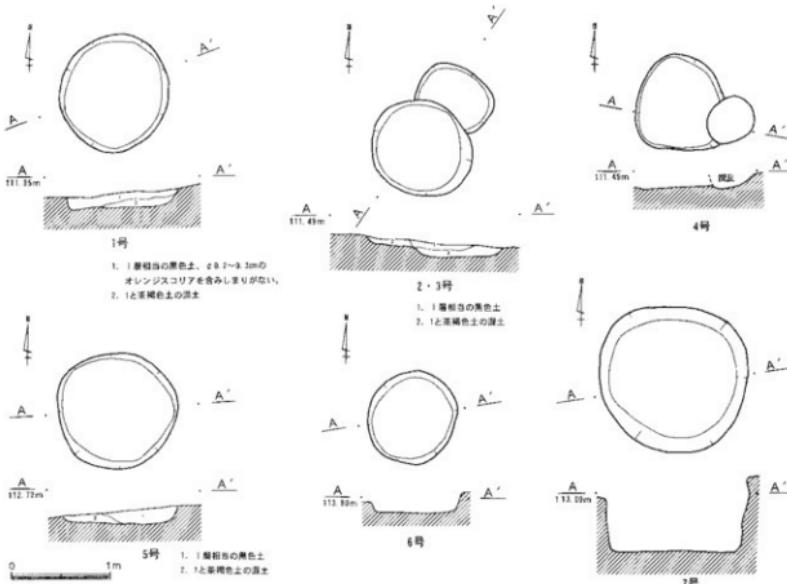
底面は、ほぼ全面に5cmから20cmほどの小石を敷き詰め、60cm程の板状の敷石を据えて埋葬面としている。埋葬面は2面に分けることができ、追葬を行ったことが想定できる。板状の敷石は第1面で5個使用し、全長165cm、第2面で6個使用し、全長235cmを測る。また、入口部に約40cmの隅丸方形の川原石を3個並べ外部と区画している。その他の石室の付属施設は検出されなかった。

〈閉塞石〉

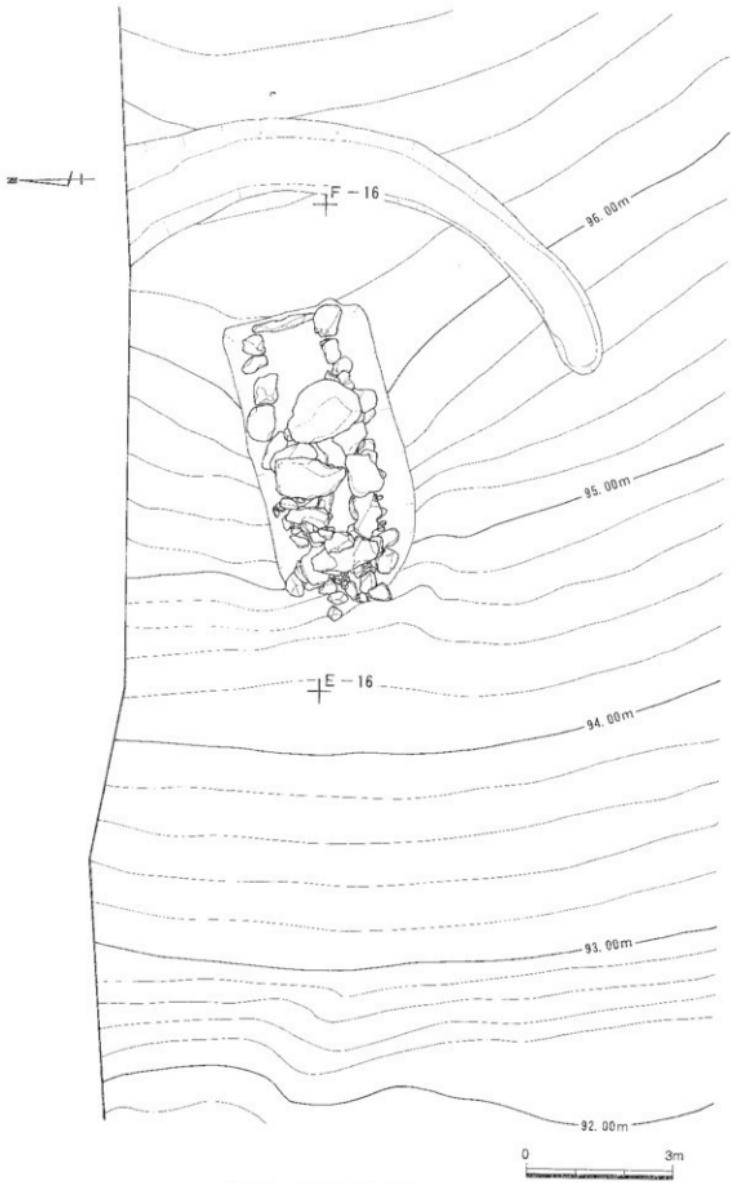
石室の閉塞には15cmから40cm程の石が使用されている。雖然と積み込まれており、石と石との隙間が多く、植物根による攪乱を大きく受けている。閉塞状況は上部が失われているため、明確なことはわからないが、現状では、確認できる側壁の高さまで達しており、奥行222cmを測る。閉塞石は第2面の板状の敷石の一部を覆っており、追葬に際して閉塞石を積み直した様にもみられない事から、確認できた閉塞石は第2面に伴うものと考えられる。



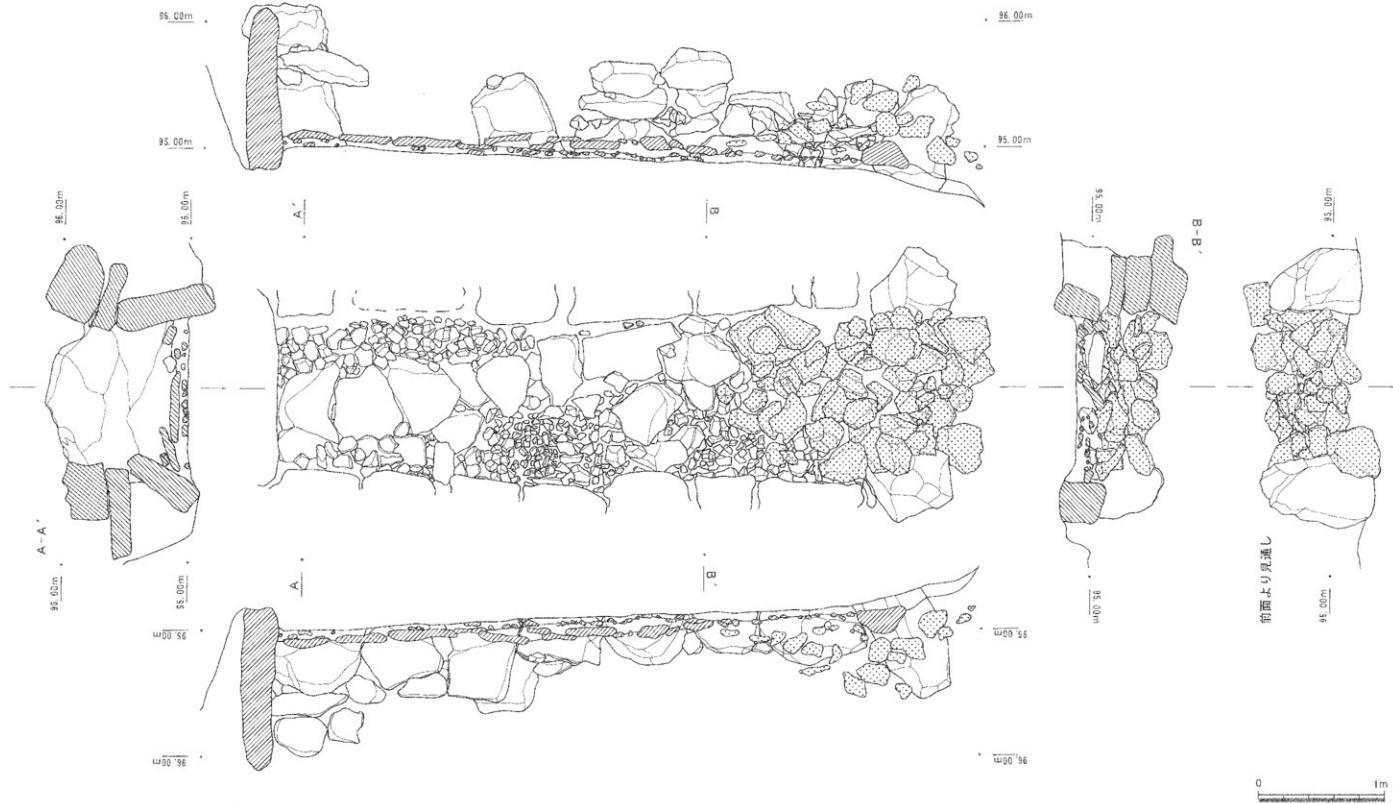
第8図 中近世土坑分布図



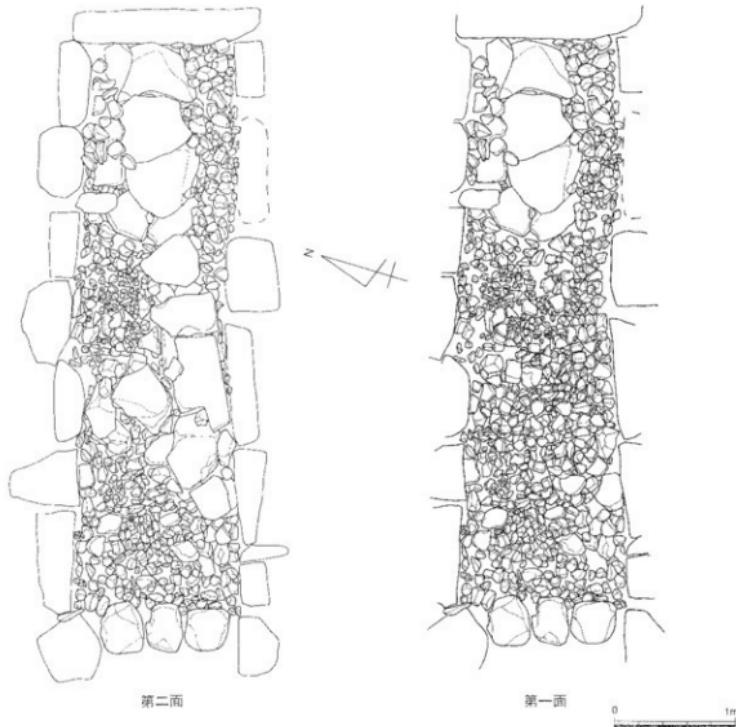
第9図 中近世土坑実測図



第10図 古墳と周辺の地形



第11図 石室展開図



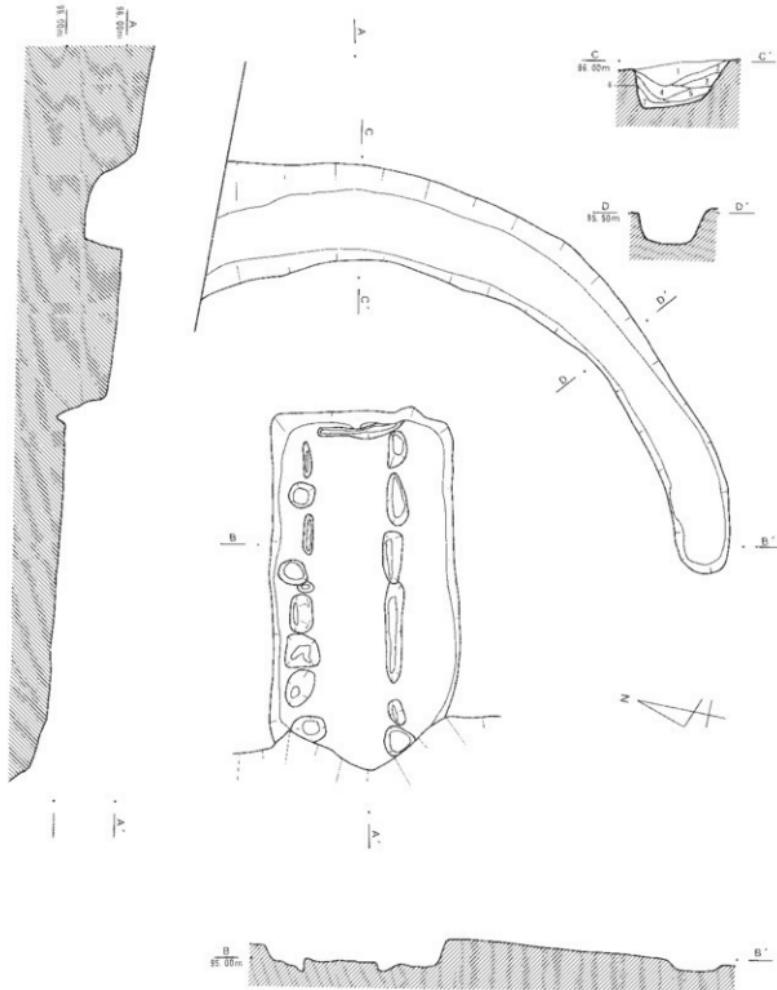
第12図 石室内平面図

〈墓壇〉

平面形は開口部が突出する舟形を呈し、長軸560cm、短軸298cmを測る。底面は敷石の痕跡による小さな凹凸が残るもの、概ね平坦であり、奥から開口部へ向け緩やかに低くなる。奥壁および側壁の基石の痕跡も明瞭に認められる。側壁の背後の掘り方は南側が広く、側石から掘り方の立ち上がりまで北側が20cm、南側が70cmを測り、壁面は両端とも急に立ち上がる。裏込め土等の構築は植物根による搅乱を大きく受けたため確認することができなかった。

〈周溝〉

主体部の東側を円形に区画する周溝が検出された。北側は調査区外で不明だが、南側は斜面を下るにしたがって浅くなり、主体部の中心部より下方では確認できなかった。主体部の長軸線上で確認した周溝の断面は、内側が直立気味に立ち上がり、外側はやや開く形状を示し、深さ68cm、上場幅158cm、下場幅104cmを測る。周溝内及び周辺にその他の遺構遺物等は検出されなかった。



層位

1層：黒色土層；径2～3mmの褐色の粒子を含む。粘性あり、しまり強く。

2層：茶褐色土層；径2～4mmの褐色スコリアを少量含む。粘性あり、しまりやや強い。

3層：明茶褐色土層；素礫色上のブロック及び、径5mm程度の褐色スコリアを含む。粘性あり、しまりやや強い。

4層：暗茶褐色土層；径2～5mmの褐色スコリア、黄褐色の粒子を含む。粘性あり、しまりやや弱い。

5層：茶褐色土層；径2～5mmの褐色スコリアが多く含む。粘性やや弱い。

6層：明茶褐色土；径5mmの褐色スコリアを多く含む最大で径10mm程の褐色の粒子を含む。粘性あり、しまり強く。

7層：褐色土層；径2～3mmの黄褐色の粒子を含む。粘性強く、しまりやや強い。



第13図 墓塚実測図

2 出土遺物

遺物は石室内と表土層より出土している。このうち石室内より出土したものは、鉄製の鐵・刀子・小刀・太刀・鏃で何れも石室の奥壁近くで検出され、第1面に伴うものと考えられる。しかし、追葬が行われたうえ、検出時に石室が露出していたことを考慮すると原位置を示すものであるかどうかは疑わしい。

(1) 武器・武具

武器類はすべて鉄製品で太刀1点、鏃2点、小刀2点、刀子2点、鐵16点が出土した。そのうち実測可能なものを18点掲載した。

〈鎌〉

1から5は鎌身の形状が長頭三角形を呈する長頸鎌である。断面形は片丸造と考えられ、刃部を作り出す。頸部は鎌身と一体で4、5では台形状と鍔状の関部が確認される。6から11も長頸鎌の頸部から莖部であり、6では莖部に木質が残存する。

12は逆刺を有する鎌である。頸部と鎌身は一体で関部は台形状を呈し、莖部の断面形は方形である。

〈刀子〉

13はほぼ完形の平棟平造の刀子で刃側の関部を欠損する。刃部は関部から鋒にかけて外湾しており、砥ぎによる刃部の研耗が著しいことが認められる。関部は直角の均等両関であり、茎洞部は直で、茎尻は角状の一文字尻となる。また、莖部には木質が残存する。

〈小刀〉

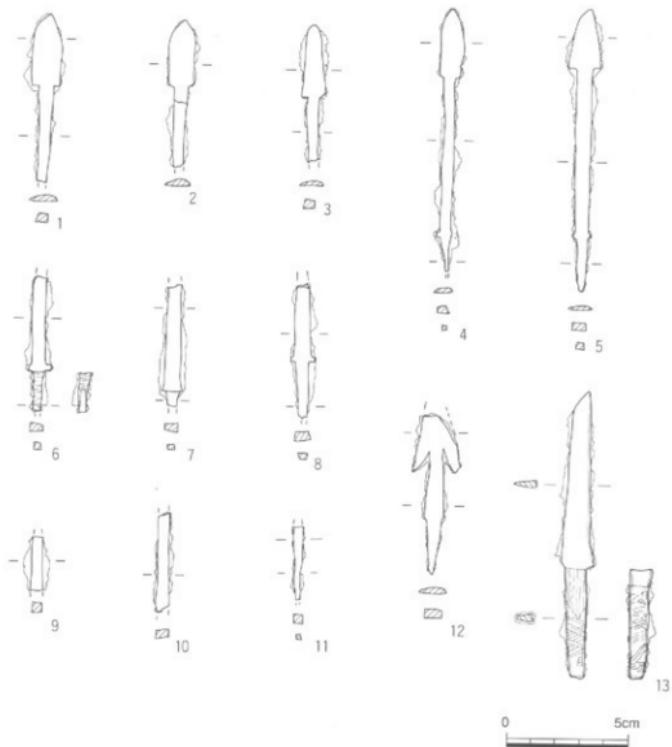
14-aは平棟平造の小刀で刃部の先から鋒と莖尻を欠損する。法量は残存値で全長28.7cm、刀身20.5cmを測り、身幅2.2cm、棟幅3.5cmを測る。関部は直角の不均等両関であり、茎洞部は直を呈する。また、莖部には木質が残存する。

14-bは鏃で円筒形を呈し、全長2.0cm、内法径2.1cm、厚さ2.5cmを測る。また、内部に木質が残存する。

15は平棟平造の小刀で、鋒と刃部の一部、莖尻を欠損する。法量は残存値で全長51.4



第14図 遺物出土状況図



第15図 鉄製品実測図 1

cm、刀身41.4cmを測り、身幅3.6cm、棟幅0.95cmを測る。鍔元孔を有し、関部は撫角の不均等両側であり、茎胴部は微先細を呈する。

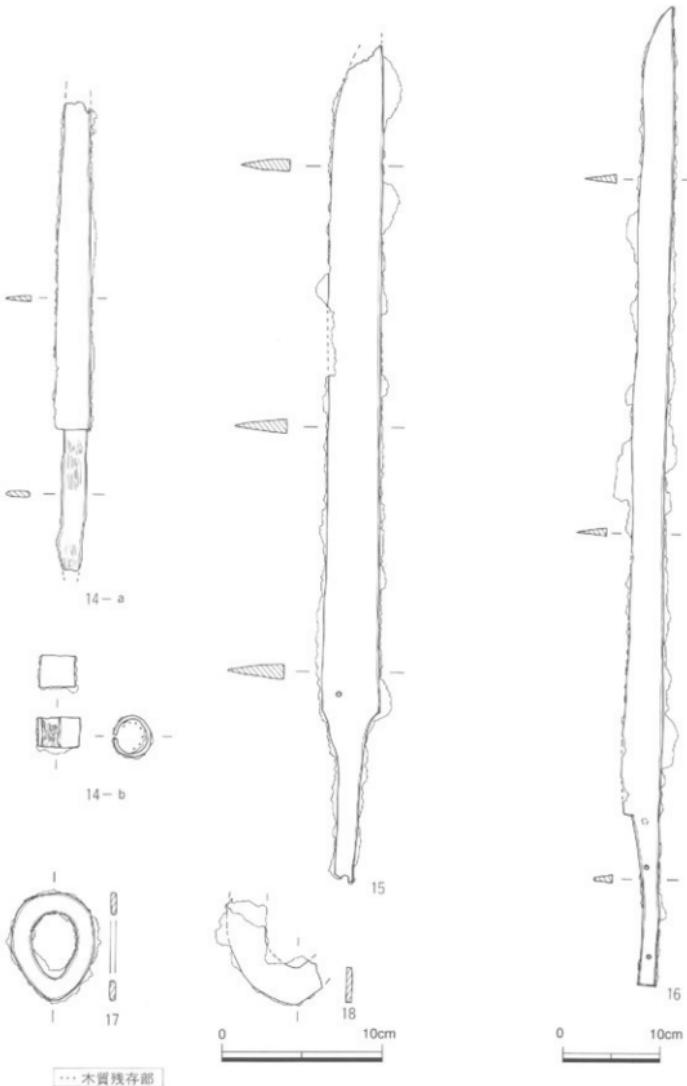
〈太刀〉

16はほぼ完形に復原できた平棟平造の太刀である。法量は全長100.5cm、刀身82.6cmを測り、身幅3.9cm、棟厚0.8cmを測る。関部は直角の片側であり、茎胴部は微先細で、三つの目釘孔を有し、茎尻は角状の一文字尻を呈する。

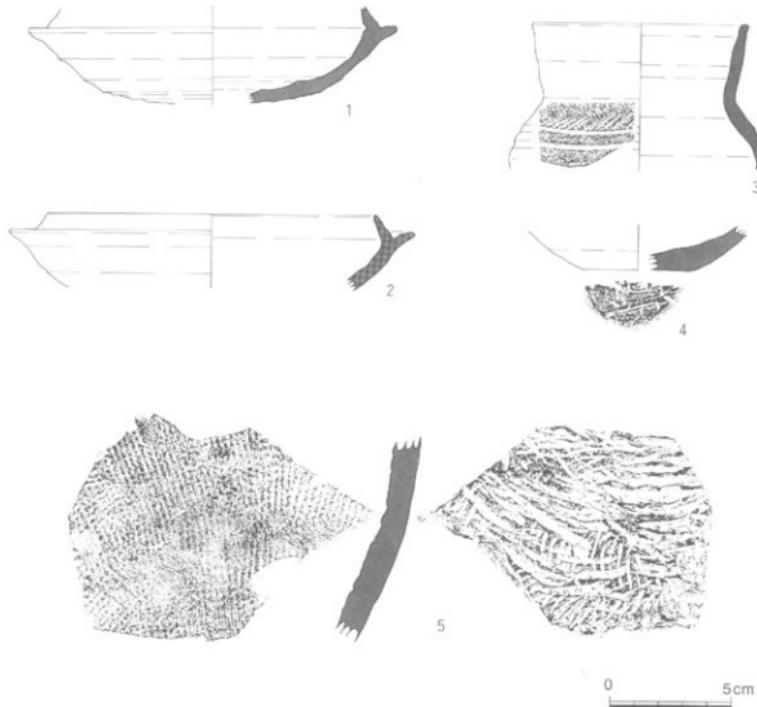
〈鍔〉

17は形状が倒卵形、断面形は方形を呈する無窓鍔である。法量は長径6.65cm、短径5.15cmで鍔幅が最大で13.5cm、厚さは3.5cmを測る。

18は破片だが、形状が倒卵形と推定できる。



第16図 鉄製品実測図 2



第17図 土器実測図

(2) 土器

須恵器を15点、土師器を1点検出したがすべて石室外の表土層からである。そのうち実測可能な須恵器5点を掲載した。1は壺身である。ロクロ水挽き成形で、受部は根元に沈線を有し、水平気味に開く。たちあがりは内傾する。底部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整が認められる。法量は推定で口径15.2cmを測る。2の壺身も同様の形状を持つと思われ、両者は口縁部の形状と法量から遠江須恵器編年の第三期後葉に比定される。法量は推定で口径16.8cmを測る。

3は小型の壺である。口縁がやや開き気味に立ち上がり、体部上面に櫛歯状工具による刺突文列を施し、その下部を二重の沈線で区画する。法量は推定で口径8.9cm、胴部径10.7cmを測る。4は小型の壺の底部でヘラ切りの痕跡が認められ、3と同一個体の可能性がある。法量は推定で底径4.3cmを測る。

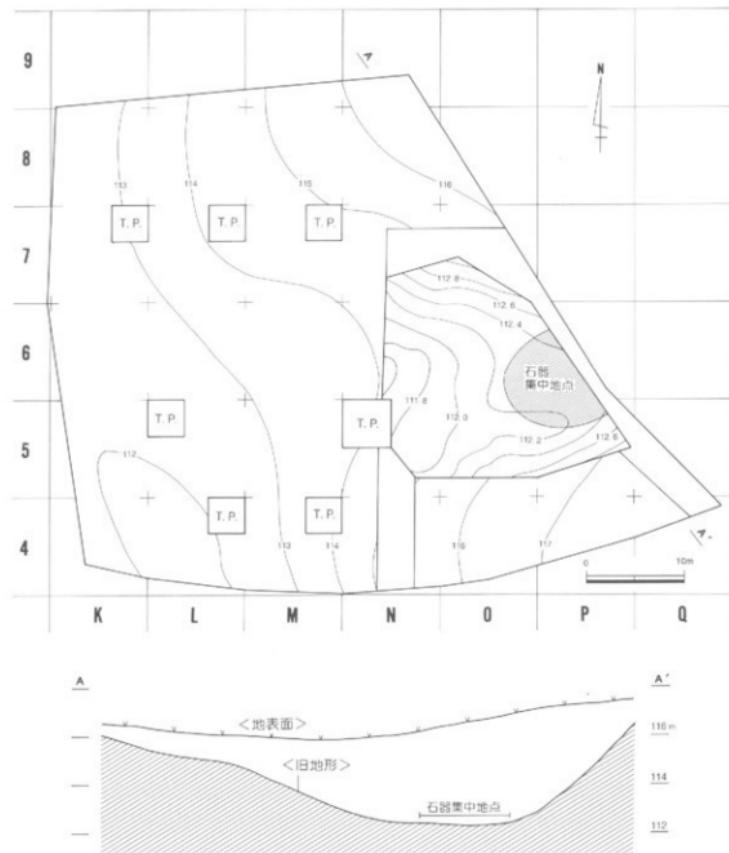
5は壺の胴部破片で、外面は平行叩き目、内面に円弧叩き目が認められる。

第3節 旧石器時代の遺構と遺物

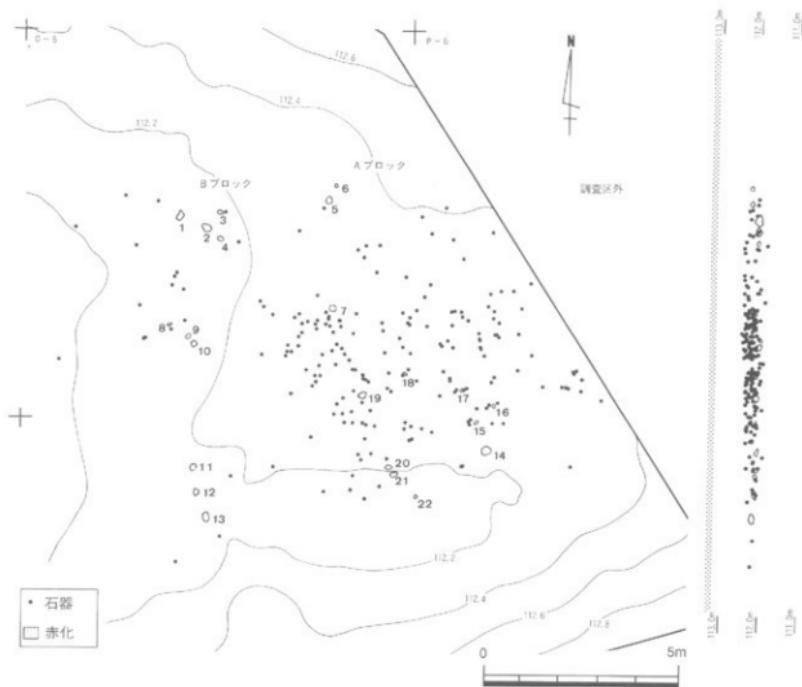
I 遺物出土状況と遺構

(1) 概要

旧石器時代の調査は確認調査の結果を受けて、比較的平坦な2区においてのみ行われた。表土除去をした結果、調査区の中心に埋没谷があることが判明したため谷の稜線上等に包含層がないことを確認した後、重機で確認調査時に遺物を検出していたP5グリッドを中心にSCIIIs4層まで約4m掘り下げた。この後精査した結果、約200点の石器と礫が出土した。



第18図 旧石器時代の調査範囲と地形模式図



第19図 遺物出土状況図

この石器群は上杉氏の火山灰同定の結果Y107直上、愛鷹・箱根標準土層ではBBVI層直上で出土することとなる。地形的には埋没谷の谷頭の底部、鍋底状に平坦になっている部分に位置しており、石器ブロックは調査区外にも広がっている。遺物は水平距離にして約20cmのレベル差があるが、縄の底部はほぼ水平であること、レベル差のある遺物間で接合関係があることから、1枚の文化層であると考えている。

(2) 石器石材

石器に使用されている石材は、点数にして94%、重量にして76%が黒耀石である。この他にホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩、玉髓が数%含まれるが、剥片剥離をしている痕跡ではなく、全て単体での遺跡外からの搬入品であると考えられる。toolについてはホルンフェルスの楔形石器と敲石、玉髓製の台形様石器を除いて黒耀石から作られており、黒耀石に依存した石器石材組成を示す。

また蛍光X線を用いての黒耀石の原産地分析の結果、伊豆・柏崎産のものと信州・蓼科産のものがあることが判明した。数量的には56%を蓼科産が占めているが、重量にすると68%となり、蓼科産が多用されていたことが解る。

表2 個別資料分類表

産地	色調	種、含有物	光沢	自然面	遺物数	その他
K S W 1	暗灰色不透明	炭灰色～暗灰色の殻。3～5mm程度の球顆が少し含まれる。	富む	アバタ状～スリガラス状	11	複合10
K S W 2	暗灰色不透明	炭黒色～暗灰色の微細な殻。3～5mm程度の球顆が一部多く含まれる。	富む	アバタ状～スリガラス状	12	複合11
K S W 3	黑色不透明(風化のため一部褐色帯びる)	暗灰色の微細な殻がわずかに見られる。2mm程度の球顆が全く含まれる。	貧い	不明	7	複合3
K S W 4	炭黒色不透明(風化のため一部褐色帯びる)	炭色の微細な殻が全く見られる。0.5mm程度の球顆をわずかに含む。	貧い	スリガラス状	7	複合4、12
K S W 5	炭黒色不透明	白色の微細な気泡が、細やかな縞を作り全体に見られ。暗灰色の殻が全体に見られる1～3mm程度の球顆が多く含まれる。	貧い	なめらか、一部発泡している。	6	
K S W 6	炭黒色不透明	白色の微細な気泡が、細やかな縞を作り全体に見られる。1～3mm程度の球顆がわざかに含まれる。	貧い	なめらか、一部発泡している。	14	
K S W 7	黑色不透明～半透明	灰色の殻が一部に見られる。	富む	スリガラス状	11	
K S W 8	黒色不透明(風化が激しく黄褐色～炭黒色帯びる)	灰色の殻が一部に見られる。	貧い	スリガラス状	3	
K S W 9	暗灰色不透明	炭黒色～暗灰色の微細な殻が全体に見られる。2～3mm程度の球顆が多く含まれる。	貧い	アバタ状～スリガラス状	1	
T T S 1	褐色透明～半透明	無け茶の微細な殻が全体に見られる。0.5～1mm程度の球顆が少し含まれる。	貧い	なめらか	9	複合7
T T S 2	青褐色透明	白色露状気泡粒子が、全体に少し散在している。1mm程度の球顆を少し含み、一部に暗灰色の殻がわずかに見られる。	貧い	スリガラス状	29	
T T S 3	青色透明	T T S 2と良く似ているが、白色露状気泡粒子が全体に多く散在している。	貧い	不明	5	複合8
T T S 4	褐色透明～半透明	暗灰色の殻が一部に見られる。0.5mm程度の球顆が多く含まれる。	富む	なめらか	9	複合6
T T S 5	褐色半透明～不透明	暗灰色露状粒子のが、全体多く見られる。0.5mm程度の球顆が多く含まれる。	富む	なめらか	43	複合1、3、5、9
T T S 6	煙色透明	暗灰色の殻が見られる。	貧い	不明	2	複合2
G B A 1	風化のため暗褐色新鮮面は黒色	2mm程度の黄褐色岩片が一部に含まれる。0.5～3mm程度の球状レンズ状の気泡が多く見られる。	新鮮な黒色感は、薄いガラス光沢	不明	4	
G B A 2	風化のため炭黒色新鮮面は黒色	1mm程度の黄褐色岩片が一部に含まれる。	新鮮な黒色感は、純いガラス光沢	不明	1	

表3 個別資料と器種

	黒耀石												その他							
	K S W 1	K S W 2	K S W 3	K S W 4	K S W 5	K S W 6	K S W 7	K S W 8	K S W 9	T T S 1	T T S 2	T T S 3	T T S 4	T T S 5	T T S 6	産地不明	G A N	H O R	C H A	合計
台形様石器	1						2			1	1			5				1	11	
ナイフ形石器														1					1	
スクレイパー類	2						1						1	1					5	
楔形石器													1	1	1				4	
二次加工剝片	1			1	1														3	
使用跡剥片							1	1		1	1	1	6	1					12	
石核											2		2						1	
剥片・碎片	11	10	7	7	6	13	5	3	1	8	24	4	5	26	1	20	4	3	1	160
敲石																			1	
合計	12	12	8	7	6	14	11	4	1	9	29	5	8	42	2	20	5	5	2	202

産地不明の点数には、極微細な碎片と、ヨゴレ等によって測定が不可能であったものも含む。

(3) 碼

Aブロックを取り囲むように礫(配石)が検出されている。これらは赤化しているものが多い(表4)。使われている石材は全て安山岩であるが、輝石安山岩と安山斑岩は遺跡の周辺の玉沢の基盤層に含まれており、現在でも容易に露頭等で手に入れることができる。しかし細粒安山岩は遺跡の周辺では入手は困難で、箱根山から搬入したものと考えられる。当遺跡ではこの石材を用いた石器は出土していないが、石斧等の石材として搬入した可能性はある。

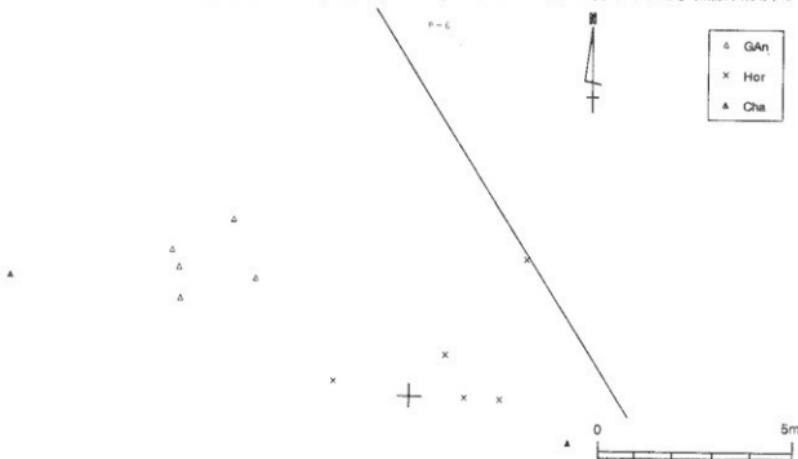
表4 種計測表

番号	石材	重量 (g)	体積 (cm³)	赤化	備考	番号	石材	重量 (g)	体積 (cm³)	赤化	備考
R 1	安山斑岩	5400	2709	○		R 12	輝石安山岩	1500	802	○	
R 2	輝石安山岩	9000	3640	○	中央に凹み有、台石として実測	R 13	細粒安山岩	5300	2180	○	石器石材の可能性有
R 3	安山斑岩	1720	734	○		R 14	安山斑岩	4600	1590	○	R 15と接合
R 4	細粒安山岩	2000	1020	○	石器素材の可能性有	R 15	安山斑岩	400	280	○	礫片、R 14と接合
R 5	輝石安山岩	3550	1392	○		R 16	安山斑岩	300	102	○	礫片、R 22と接合
R 6	安山斑岩	740	210	×		R 17	安山斑岩	250	8	○	礫片
R 7	細粒安山岩	6360	2405	○		R 18	輝石安山岩	1000	304	○	
R 8	安山斑岩	12	1	×	礫片	R 19	安山斑岩	4600	2240	○	
R 9	輝石安山岩	1454	640	○		R 20	輝石安山岩	3300	1222	○	
R 10	安山斑岩	3450	1245	×		R 21	安山岩質滑石	1430	795	○	
R 11	輝石安山岩	2450	880	○		R 22	安山斑岩	150	4	○	礫片、R 15と接合

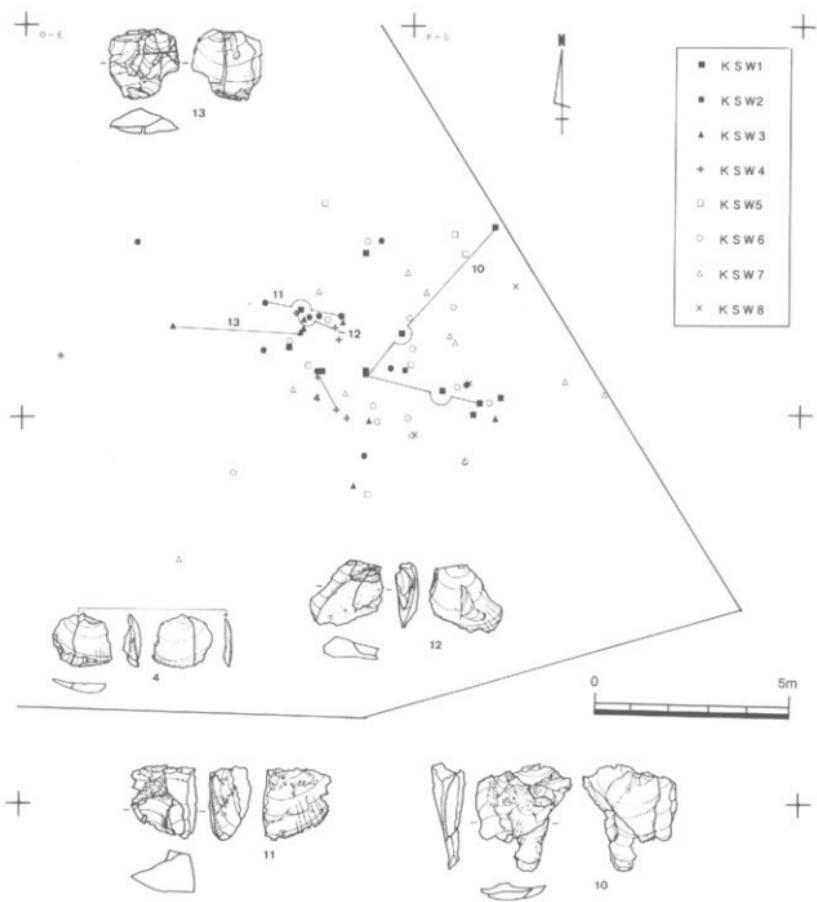
(4) 個別資料分類と石器ブロック

黒耀石については、産地同定されたものに限って可能な限りの個別分類の作業をおこなった。これは、色調・含有物・光沢・自然面の各項目について15倍のルーペ下と肉眼によって分類したものである。分類の基準が表面的な特徴に頼っていることから、TTS2とTTS3は同一個体の可能性が、TTS5は更に細分化される可能性がある。なお、頁岩とガラス質黒色安山岩、玉髓は出土数が少ないので、個別分類はおこなっていない。各個体の特徴は表2に示した。

個別資料の分布図は第19図に示した。平面的にはA、Bの2ブロックに分けられる。黒耀石以外の



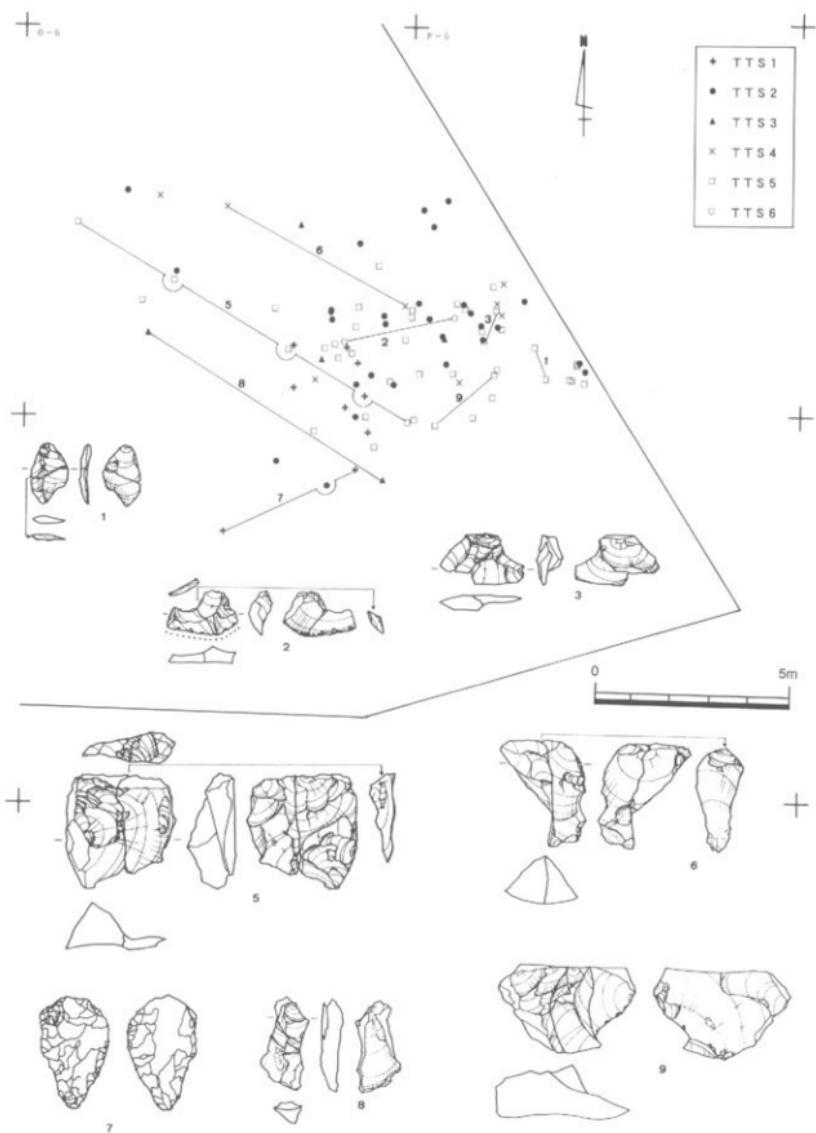
第20図 遺物分布図 I (石材別)



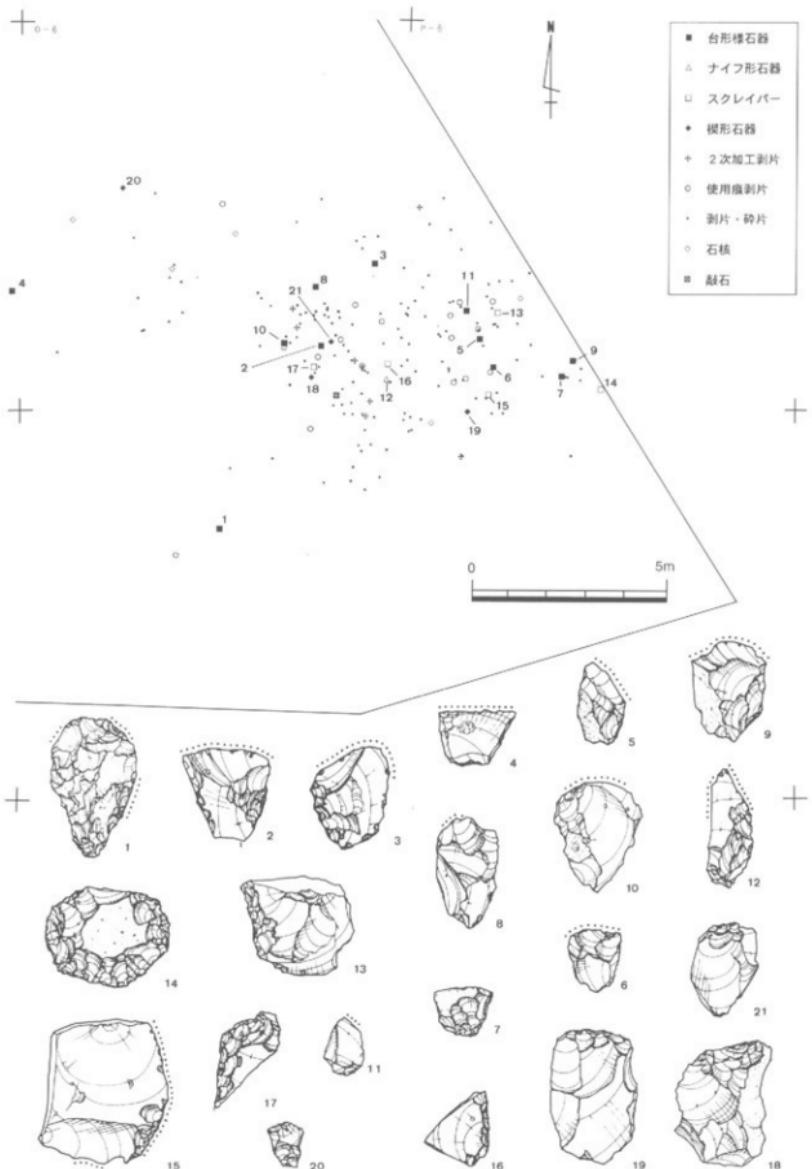
第21図 遺物分布図2（個体別）

石材の分布を見ると(第20図)、Aブロックにホルンフェルスが、Bブロックにガラス質黒色安山岩が出土壤している。しかし黒耀石に関しては各個体の集中地点があるわけではなく全体的に散漫に分布しており、ブロック間に接合関係があることから、2つの石器ブロックはほぼ同時期のものと考えられる。

個別資料と器種の関係は表3に示したとおりである。柏峰産の黒耀石は各個体の遺物数が少なく、KSW6以外は剥片剥離をおこなっている可能性は低い。一方蓼科産のものはTTS2、TTS5において剥片剥離をおこなっているようであるが、原石を持ち込んでいるというよりも、表皮等を落として分割された石核を持ち込み、せいぜい数回の剥離を行う程度である。そのため、同一個体の中に複数の石核が含まれる。また、TTS1は台形様石器とその調整加工剥片からなる個体である。



第22図 遺物分布図3（個体別）



第23図 遺物分布図 4 (器種別)

2 出土遺物

第VI黒色帶直上では石器は約200点出土した。用いられている石材は重量にして76.4%を黒縞石が占め、ホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩、玉髓を含む。黒縞石の推定原産地は蓼科と柏崎である。石材と器種の組成は表3に示したとおりである。

(1) 台形様石器 (1~11)

剥片の縁辺部を刃部に設定し、基部や側縁部を調整（折り取り）したり、古い剝離面を利用して複ね台形状に仕上げたものを台形様石器とした。この際、7倍のルーペによって微細な剝離が確認された部位を…で示し、刃部として図化している。この場合、今回出土した台形様石器と分類されたもの全てが幅広、横長の素材剥片を横位に使用しているのが特徴である。これらは縁辺部や基部の調整部位や方法によって4類に分けることができる。

A類 (1)

基部を中心に両面に面的な調整加工が施されるものである。

1が該当し、素材は横長の剥片を横位に用い、表面は刃部を除いてほぼ全面に面的加工を施す。裏面は基部と、バルブを除去するために左縁辺部に平坦剝離を施す。刃部は旧剝離面と主要剝離面からなる鋭利な縁辺部で、曲線を描いている。下半部に観察される微細な剝離痕は着柄時のものとも考えられる。

この石器については台形様石器としてここでは報告するが、刃部が曲線を描いていることや、接合した剥片（接合7）を刃部のリダクションの結果とすると縁辺部を刃部として考えることもできる。器種や用途に関しては今後検討を要する。

B類 (2, 3)

側縁部に平坦な調整加工をもつものである。

2は稜とバルブを平坦剝離によって除去している。基部は折り取りである。3は両面にボジ面を持つ剥片を素材として、残った剥片の打面より平坦剝離を施す。

C類 (4~6)

側縁部が折り取りや平坦な旧剝離面（打面や節理面を含む）からなるものである。

4は玉髓製の幅広剥片の打点方向の縁辺部を折り取り、折り取り部には若干の調整を加える。左側辺は節理による折れであり、基部には微小だが加工痕が観察される。5は左側縁部は折り取り、右側縁部は素材剥片の打面からなる。6は特に調整加工は観察されないが、右側縁部は平坦な旧剝離面であり、微細剝離がある一辺を刃部とすると平面形が類似することから本類に含め、台形様石器として分類した。

D類 (7~11)

刃部に対して基部や縁辺部に調整加工が観察されるものである。

平坦な刃部を持つ7~10と斜刃を持つ11に細分できる。台形様石器としての根拠は弱いが、微細な剝離痕のある一辺を刃部として上辺とした時、基部付近に観察される調整加工と平面形を積極的に評価した。

(2) ナイフ形石器 (12)

12は素材剥片の打面側の縁辺部から連続した調整を加えたもので、素材剥片の打点が加工面から遠く、平坦な剝離でプランティングとは異なるため、スクレイバー類のリダクションの結果とも考えられる。しかし、使用痕が剥片の鋭い縁辺部に集中しており、調整部分に見られないことからここではナイフ形石器として扱った。

(3) スクレイパー (13~17)

剝片の縁辺部に連続した加工を明確に施し、そこを刃部としているものをスクレイパーとして分類した。これらは削器としての機能を持つと考えられる。

13はボジ面を両面に持つ幅広の剝片を素材とし、左縁辺部に連続した加工を施す。刃部の裏面には、打面を用意したためと考えられる剥離が観察され、刃部はややノッチ状に凹む。またこの剝片にはパンチコーンが観察される。14は全周に調整加工が及ぶものである。しかし、IV下、V層に見られるような分厚い素材を用いたものとは基本的に異なり、幅広の比較的薄手の剝片を用いている。打面は調整により落とされており、剝片の末端部も裏面にも加工を施して表面の打面として利用されている。15は分厚い剝片素材の石核の縁辺部を加工して刃部としたもので、調整加工自体は一部のみに見られるが、使用痕は縁辺部一辺に連続的に観察される。16は旧剥離面を打面として加工を施したものである。他のスクレイパーが腹面と背面の作り出す膨らみをおびた鋭角の縁辺部を刃部として加工して利用しているのに対し、これは旧剥離面を打面としており、作業面と打面の角度が大きく調整剥離が短いのが特徴である。

(4) 楕形石器 (18~20)

石器の対面する両端に潰れが観察されるものである。18、21は残核を用いたもので、19は幅広の剝片を素材とする。

(5) 二次加工剝片 (22~25)

剝片の一部に調整加工があるもので、連續性がなくスクレイパーとして分類不可能なものを一括した。22、23は加工部がノッチ状になるものである。24は残核の端部3ヶ所に調整加工を施したもので、楕形石器の可能性もある。

(6) 使用痕剝片 (25~35)

使用痕と考えられる微細な剥離が観察される剝片で、旧剥離面と主要剥離面からなる鋭い縁辺部を刃部として使用している。

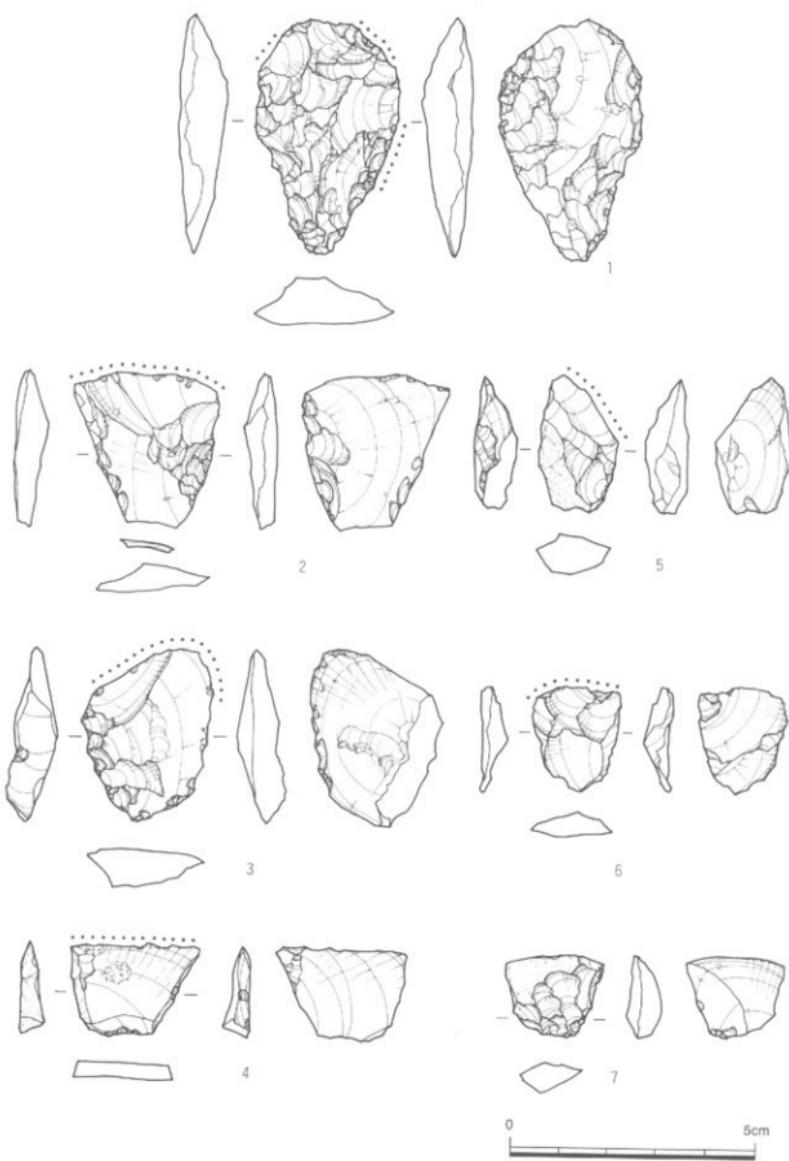
(7) 石核 (36~40)

サイコロ状で、打面と作業面を頻繁に変えながら剝片剥離する複設打面石核 (36、37) と分厚い剝片を素材とし、縁辺部から打撃を加え剝片剥離するもの (38~40) に分類できる。両者とも幅広から横長あるいは貝殻状の剝片を剥離する。

(8) 敲石 (41)・台石 (42)

敲石 (41) はホルンフェルスの円錐を利用し、端部に打痕が観察される。上半部は欠損しており、右縁辺部の剥離痕は上半部が欠損した後の打撃の際に生じたものと考えられる。石器ブロックの中心部(第23図)から出土している。

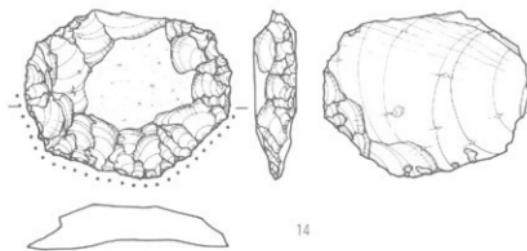
42は疊として取り上げているが、中央部に凹部があり、わずかに打痕が観察されることから台石として固定化した。この他にも疊の中には台石に使われたものが存在していると思われるが、使用痕跡が不明確であるため、固定していない。



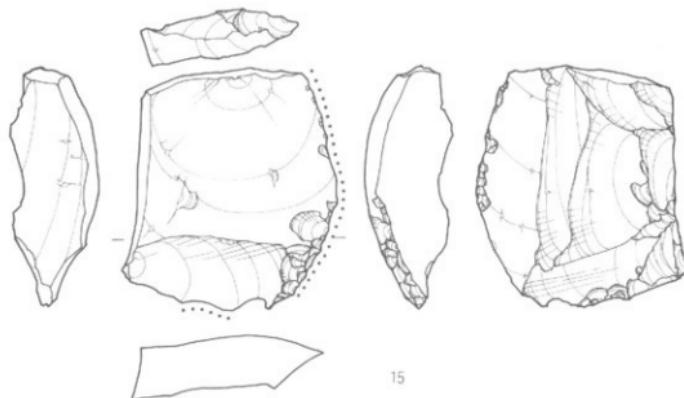
第24図 台形様石器



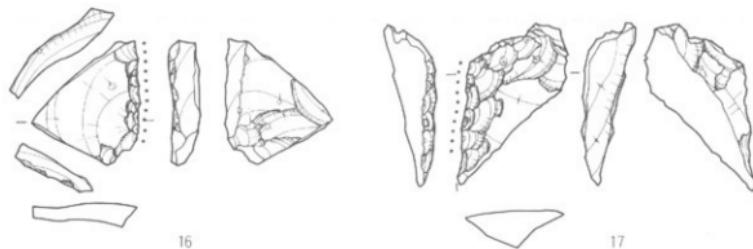
第25図 台形様石器・ナイフ形石器・スクレイバー



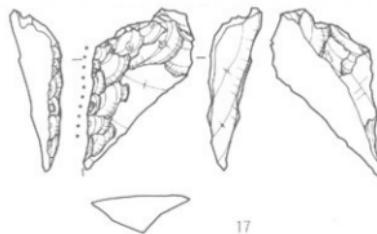
14



15



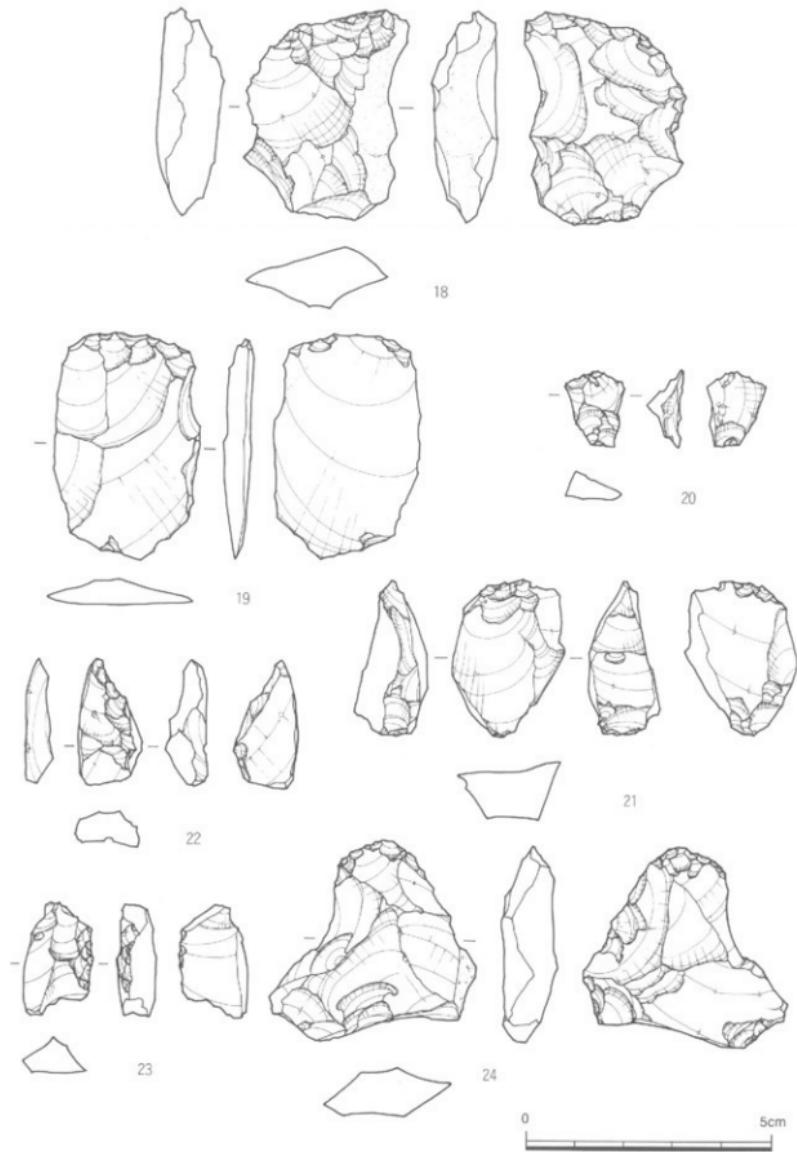
16



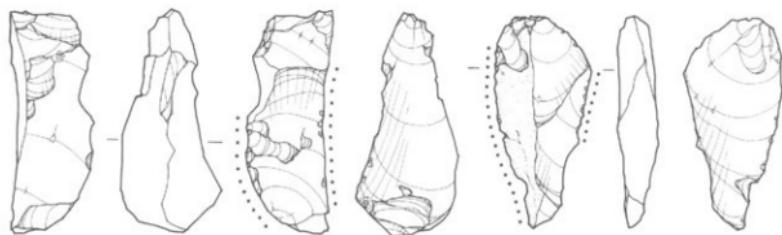
17



第26図 スクレイバー



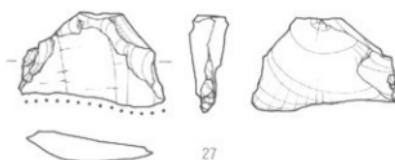
第27図 楔形石器・二次加工剥片



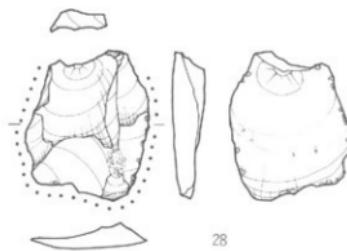
25



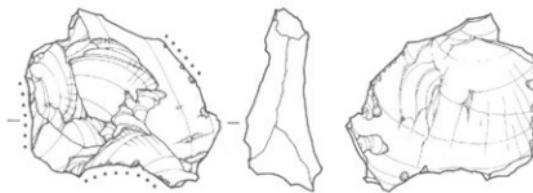
26



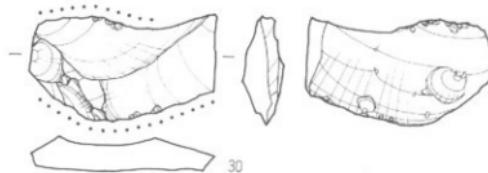
27



28



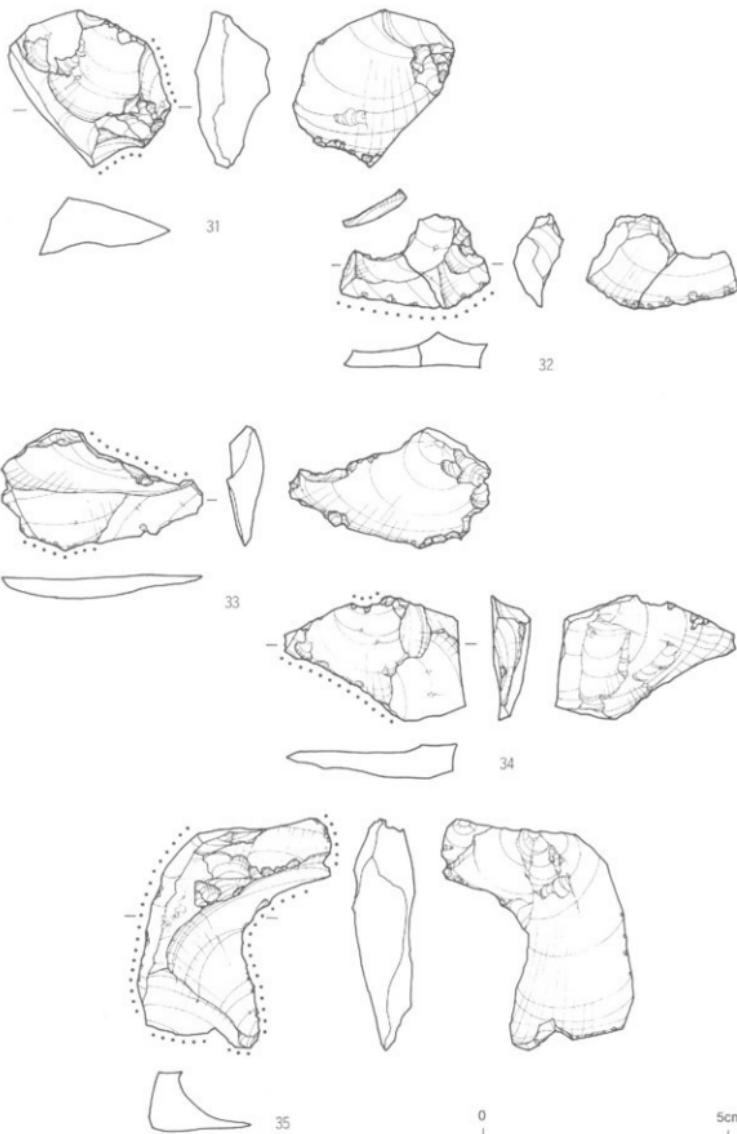
29



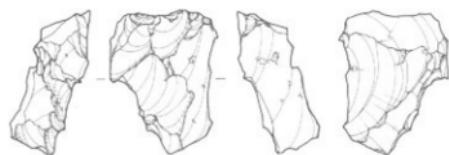
30



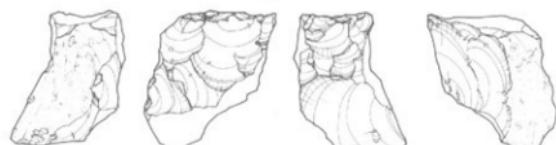
第28図 使用痕剥片 1



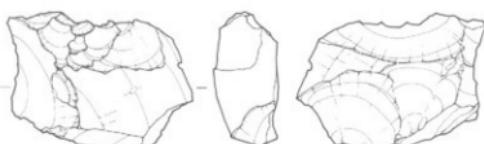
第29図 使用痕剥片 2



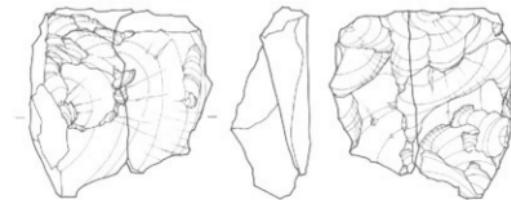
36



37



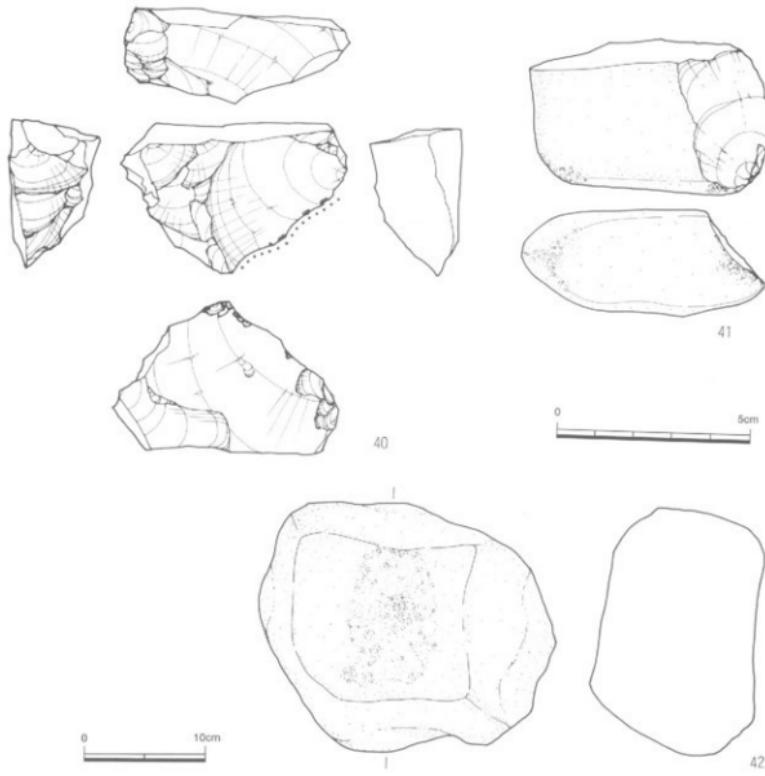
38



39



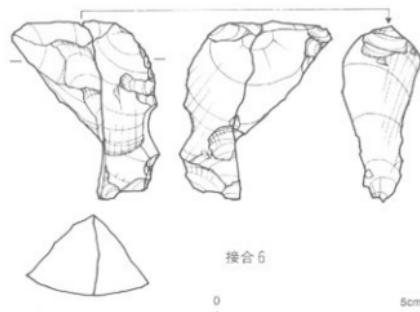
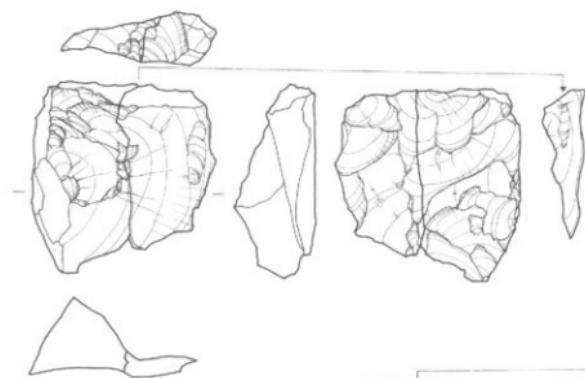
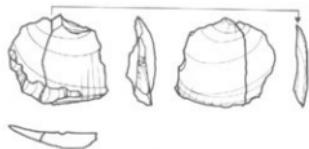
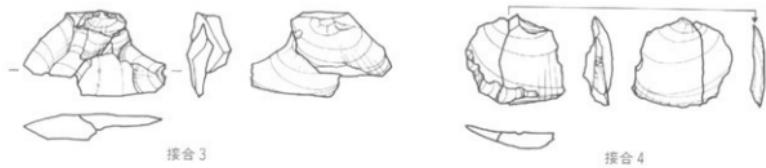
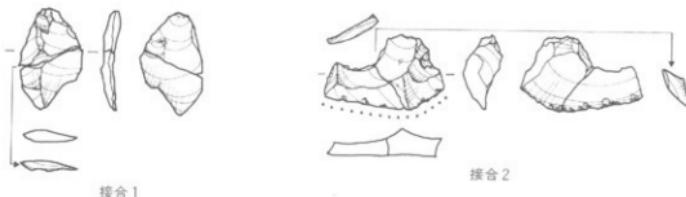
第30図 石核



第31図 石核・敲石・台石

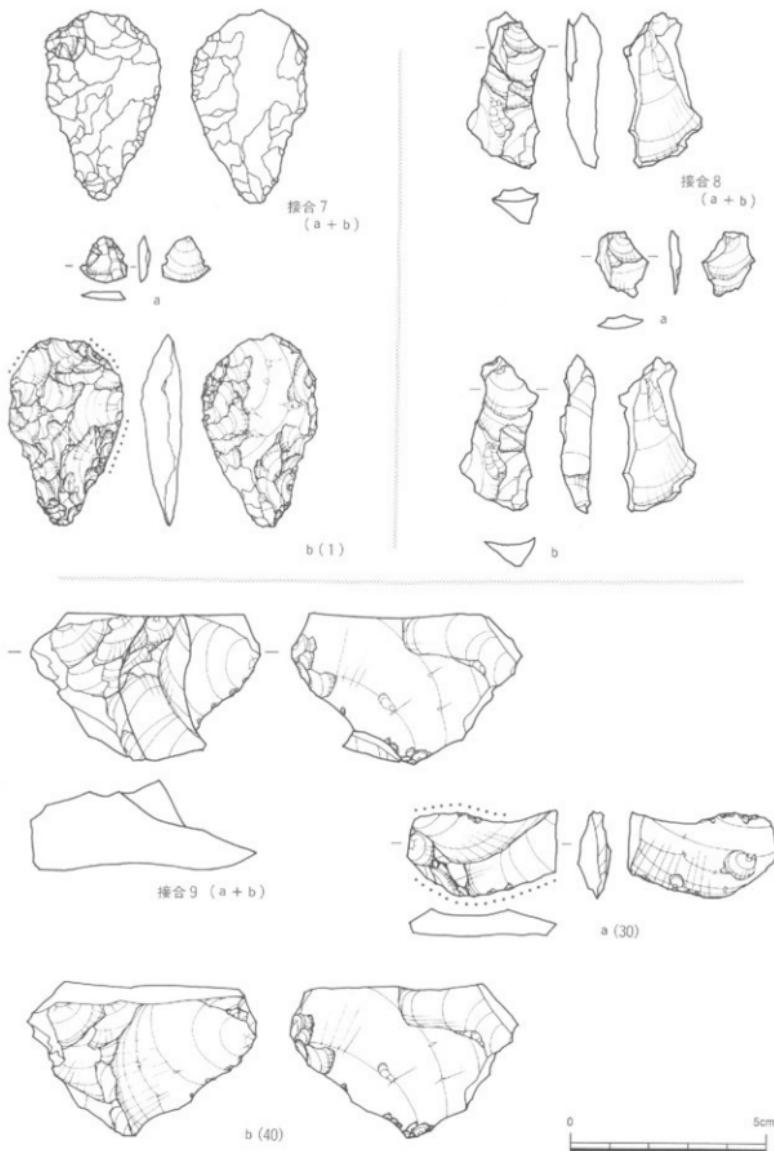
表5 石器計測表

回数No.	石器No.	器種	石材	産地	個体番号	縦長 (mm)	横長 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	回数No.	石器No.	器種	石材	産地	個体番号	縦長 (mm)	横長 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
1	173	台形刮削器	黑曜石	TTS	1	42.7	25.7	13.0	11.10	22	55	二次加工片	黑曜石	KSW	6	25.8	13.2	7.0	2.30
2	174	台形刮削器	黑曜石	TTS	5	31.4	25.0	4.7	4.90	23	60	二次加工片	黑曜石	KSW	3	24.0	14.1	5.6	2.00
3	34	台形刮削器	黑曜石	TTS	5	36.3	27.7	8.1	6.50	24	13	二次加工片	黑曜石	KSW	7	36.7	42.0	0.14	6.60
4	64	台形刮削器	瓦砾			18.4	26.2	4.2	1.58	25	106	使用面削片	瓦砾石	TTS	4	45.8	20.9	14.4	19.36
5	183	台形刮削器	黑曜石	TTS	5	26.7	16.7	8.7	3.50	25	54	使用面削片	瓦砾石	KSW	8	43.3	20.0	7.4	4.70
6	99	台形刮削器	黑曜石	TTS	5	21.4	16.0	5.0	1.50	27	103	使用面削片	瓦砾石	TTS	5	19.8	23.3	6.9	3.30
7	146	台形刮削器	黑曜石	KSW	7	17.6	20.1	6.3	1.50	28	182	使用面削片	瓦砾石	TTS	5	35.2	25.2	5.5	3.80
8	57	台形刮削器	黑曜石	KSW	7	37.8	27.3	5.6	3.50	29	45	使用面削片	瓦砾石	TTS	2	36.1	41.2	13.2	14.50
9	171	台形刮削器	黑曜石	TTS	5	34.4	25.4	7.2	8.10	30	218	使用面削片	瓦砾石	TTS	5	27.1	38.3	7.8	5.80
10	104	台形刮削器	黑曜石	KSW	1	25.5	38.2	7.5	8.70	31	96	使用面削片	瓦砾石	TTS	5	32.7	33.9	14.5	10.50
11	213	台形刮削器	瓦砾石	TTS	2	15.5	13.8	5.5	1.40	32	51	使用面削片	瓦砾石	TTS	6	19.0	14.4	8.2	1.80
12	29	ナイフ状器	黑曜石	TTS	5	41.8	16.0	9.0	5.40	33	15	使用面削片	瓦砾石	TTS	5	41.4	24.5	5.5	4.20
13	23	スライバー	黑曜石	TTS	4	34.2	40.3	12.6	15.50	34	43	使用面削片	瓦砾石	KSW	7	24.4	36.6	17.9	4.70
14	112	スライバー	黑曜石	KSW	5	34.5	42.6	8.9	12.20	35	125	使用面削片	瓦砾石	TTS	5	48.3	33.4	11.9	14.90
15	141	スライバー	黑曜石	TTS	5	40.4	42.7	14.3	36.30	36	62	石核	瓦砾石	TTS	2	38.5	25.6	14.9	12.60
16	119	スライバー	黑曜石	KSW	2	25.8	22.0	5.8	3.00	37	110	石核	黑曜石	TTS	2	36.1	24.0	21.0	23.50
17	92	スライバー	黑曜石	KSW	7	34.4	26.5	8.1	3.30	38	175	石核	ガラス質黑色安山岩		35	7	45.8	14.3	26.71
18	138	楔形石器	黑曜石	TTS	4	43.1	36.3	12.9	16.40	39	63	石核	黑曜石	TTS	5	49.6	26.0	18.3	21.90
19	207	楔形石器	ホルンフェルス			29.3	45.7	4.5	6.42	40	14	石核	黑曜石	TTS	5	38.9	58.4	22.0	41.00
20	135	楔形石器	黑曜石	TTS	2	15.7	12.3	5.0	0.80	41	299	敲石	ホルンフェルス		37.5	60.6	27.0	76.45	
21	82	楔形石器	黑曜石	TTS	5	32.0	23.0	13.2	8.70										

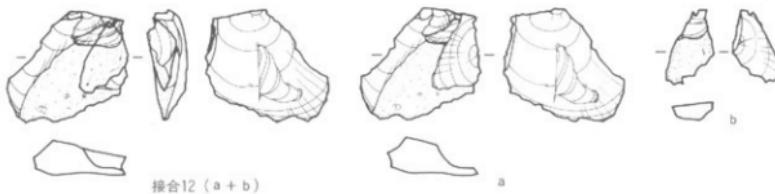
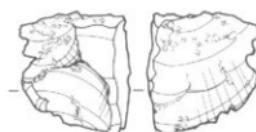
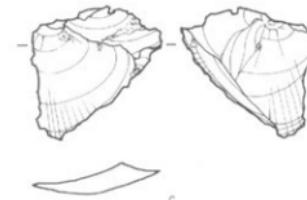
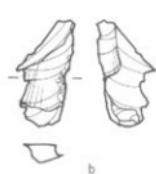
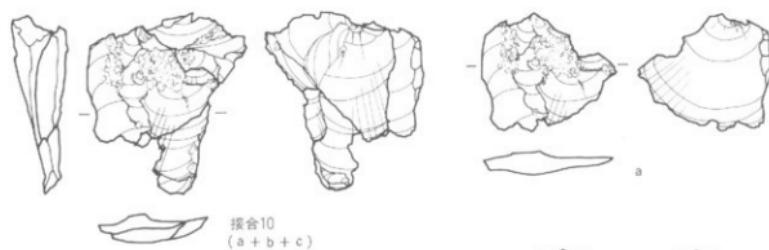


0 5cm

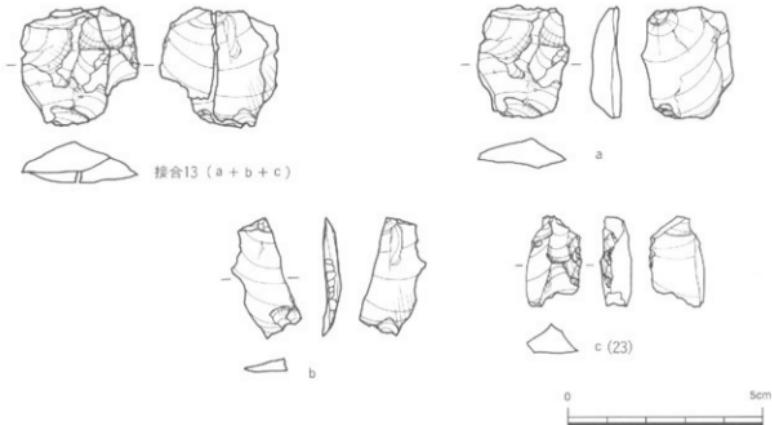
第32図 接合資料 1



第33図 接合資料 2



第34図 接合資料3



第35図 接合資料4

3 接合資料と剥片剝離技術

13個体に接合関係が認められた。接合1～4は折れた資料の接合で、3は節理が原因の折れである。接合7は台形様石器の調整剥片の接合関係であると考えられる。同一個体中には7-aと類似する剥片が他に7点含まれている。

剥片剝離技術については、剥離技術の全般を示す資料がなく一部が残るのみである。剥片や接合資料は同一方向あるいは対極する方向の剥離面を持つことが多い（接合8、接合9、接合10、接合13）。

柏峰産の黒耀石は、KSW7を除いて節理が強く球顆を多く含むので、接合資料を見てもこれらに影響されて折れや歪みが発生している。当然のように定型的な石器への利用頻度も低く、充分な大きさの剥片も得られていない。

一方、比較的良質の石材である蓼科産の黒耀石は、石核の38～40に示すような盤状の石核（剥片素材であることが多い）の縁辺部にそって作業面が移動しながら、数回の打撃をおこなっている。また、資料の中に、原縫面をもつものが少なく、TTS2、TTS5のように接合関係はないが、同一個体中に2～3個の石核を持つ資料がある。おそらく分割され準備された石核を本遺跡に搬入し、剥片剝離作業をおこなっているのであろう。本遺跡から出土した剥片の中にはポジティブ面を両面にもつものがある。これは分厚い剥片の打面と同じ面を新たに打面として活用し、剥片剝離を行っているためである。

本遺跡で出土した石器は基本的に横長・幅広で、台形様石器ではこの素材剥片を横位に利用している。

第IV章 まとめ

〈古墳時代〉

検出された古墳は必ずしも残存状態はよくなかったが、床面が二面確認され、追跡が行われたことが確認でき、鉄製品も木質部の残るもののが存在した。石室の規模や側壁基石の状態は小平B・C遺跡と類似が指摘できるが、そちらの残存状況も芳しくないため、今後の資料の増加をまって、本墳の位置づけを再検討する必要がある。年代も石室内より土器類の共伴がなかったため、厳密性を欠くが表土層より出土した須恵器類の年代と周辺の群集墳との比較より6世紀後葉から7世紀前葉に考えられる。

〈旧石器時代〉

BBVI層直上(Y10810)に生活面を持つ文化層が検出された。箱根西麓はBBVII~BBIV層の分層が困難であるため、層位的には沼津市三明寺遺跡の火山灰分析結果を参考にしている。つまり、本遺跡で遺物包含層に含まれていたY108が(上杉陽氏現地指導結果による)、三明寺遺跡ではBBVとBBVIの層境のスコリア層で確認されていることから、BBVI層直上という表現をとっている。これは愛鷹・箱根編年の中I期後にあたる。

石器群は概ね1ブロックと考えることが出来る。この石器ブロックは直径8m程の円形を呈し、石器製作跡と考えられる。同期には直径30mにもなる環状ブロックが存在するが、これとは明らかに性格を異にするものである。

石器の器種組成は台形様石器を中心としたもので、スクレイバー(削器)、楔形石器、ナイフ形石器が含まれる。台形様石器には基部を平坦な剝離で調整する精製品と、明確な基部加工を持たないものがあり、いずれも横長・幅広の剥片を横位に用いるのが特徴である。スクレイバーでは剥片の一部を残して刃部がU字状にまわるものが出土している。刃部をこれほど明確に作り出しているものは当該期では異色であり、台形様石器として分類した両面加工の石器とともに今後の検討課題となる。使用石材は黒耀石に偏っており、柏原産のものと蓼科産のものがあるが、石質の良い蓼科産の黒耀石を定型的な石器に使用することが多い。また石器ブロックの周辺で出土した礫の石材はそのほとんどが、遺跡周辺で採取できる(玉沢の基盤層に含まれる)輝石安山岩であったが、中に箱根山で採取できる細粒安山岩が3点含まれている。意図的に遺跡に搬入していると考えられ、石斧の石材になり得ないか(調査では石斧は出土していない)検討する必要がある。剥片剝離技術は、横長・幅広の剥片を取るためのもので2種類が存在する。一つは打面と作業面とを入れ替ながら剥片剝離をおこなうもので、残核が立方体を呈す。もう一つは分厚い剥片を素材としたもので、剥片の打面や旧剥離面を打面とするため、しばしば両面にポジティブ面を持つ剥片が剝離されることがある。いずれも原剥離面(旧剥離面を含む)を有する剥片が出土していないことや、各個体の遺物数も少ないとから、石核として用意され本遺跡に搬入され、若干の剥片剝離作業をおこなっているものと考えられる。

遺跡の立地に関しては、西に向かって開く谷の谷頭部の底、比較的平坦になった場所に当遺跡はある。旧石器時代の遺跡の立地は、台地の縁辺部や丘陵の先端部などが一般的であるが、本遺跡のような地形は今後気をつけて見ていく必要がある。

註1 森嶋 富士夫氏の指摘による

〈謝辞〉

生茨沢遺跡の現地調査・報告書作成にあたり、浅学の担当者に対して多くの御教示・御指導を賜りました。最後になりましたが、ここに御芳名を挙げさせていただき謝辞といたします。

三島市文化振興課 鈴木敏中、沼津市文化財センター 高尾好之、同 笹原芳郎 (敬称略)

〈参考文献〉

- | | | |
|----------|------|--|
| 三島市教育委員会 | 1990 | 「伊豆佐野遺跡群発掘調査」 三島市文化財発掘調査年報2 |
| 三島市教育委員会 | 1991 | 「夏梅木遺跡群」 三島市埋蔵文化財発掘調査概報 |
| 三島市教育委員会 | 1992 | 「山神社塚原古墳群」 三島市埋蔵文化財発掘調査報告I |
| 三島市教育委員会 | 1993 | 「向山古墳群」 三島市埋蔵文化財発掘調査報告II |
| 三島市教育委員会 | 1994 | 「初音ヶ原A遺跡第5地点」 三島市文化財発掘調査年報6 |
| 三島市教育委員会 | 1996 | 「向山古墳群測量調査」 三島市埋蔵文化財発掘調査報告V |
| 三島市教育委員会 | 1997 | 「小平C遺跡 小平B遺跡」 |
| 三島市教育委員会 | 1998 | 「三島市遺跡地図・地名表」 |
| 三島市教育委員会 | 1998 | 「赤王山古墳群」 三島市埋蔵文化財発掘調査報告VI |
| 沼津市教育委員会 | 1982 | 「子の神・大谷津・山崎II・丸尾II」 沼津市文化財調査報告書27 |
| 沼津市教育委員会 | 1987 | 「広合遺跡発掘調査報告書」 沼津市文化財調査報告書41 |
| 沼津市教育委員会 | 1988 | 「中見代I遺跡発掘調査報告書」 沼津市文化財調査報告書46 |
| 沼津市教育委員会 | 1988 | 「土手上・中見代II・第III遺跡発掘調査報告書」 沼津市文化財調査報告書43 |
| 沼津市教育委員会 | 1989 | 「清水柳遺跡発掘調査報告書その1」 沼津市文化財調査報告書47 |
| 沼津市教育委員会 | 1990 | 「清水柳遺跡発掘調査報告書その2」 沼津市文化財調査報告書48 |
| 沼津市教育委員会 | 1991 | 「広合遺跡(e区)・ニツ洞遺跡(a区)発掘調査報告書」 沼津市文化財調査報告書52 |
| 磐田市教育委員会 | 1979 | 「磐田市坂下古墳群第1号墳発掘調査報告」 |
| 臼杵聰 | 1984 | 「古墳時代の鉄刀について」 日本古代文化研究創刊号 |
| 高尾好之 | 1995 | 「第I期の石器群」 愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 予稿集 |
| 植松章八 | 1992 | 「遠江・駿河・伊豆における古墳の終末」
國立歴史民俗博物館研究報告第44集 東国における古墳の終末(本編) |
| 杉山秀宏 | 1988 | 「古墳時代の鉄鎌について」 稲原考古学研究所論集第八 |
| 石器文化研究会 | 1991 | 「AT降灰以前の石器文化—関東地方における変遷と列島内対比」 石器文化研究3 |
| 上杉 陽他 | 1996 | 「静岡県愛鷹山麓、三明寺遺跡のチフリ層位」「第四紀露頭集 日本のチフリ」日本第四紀学会 |

〈調査参加者名簿〉

後藤 博 斎藤 嵩一 大坪 清吉 渡辺 异 金井 敏 藤田 正大 桑島 孝
望月 武夫 外川 仁之 山本 良作 山口 博規 小野 泰 河野 新一 金成 勉
野村 淳 栗原 計二 鈴木 学 小森 修 菊池 茂 小野 孝 斎藤 晋
石井 則雄 鬼沢 幸江 岩間 昭子 田利三津子 稲葉 澄枝 峰光 マサ 横田 眠子
加藤 忠子 津々野詩織 潤川 礼子 高遠 美幸 柴木 崇 森鶴富士大 武士 晴信
渡辺 美行 鈴木 八郎 中津 雅俊 中村 秋江 福地 幸子 姫妙 洋子 夏目不比等

《石材鑑定》

森鷗富士大

〈造物写真摄影〉

商務 雜

表一覽覽石器

万世一尊者？

石經一書考

石器一類裝4	石器名	材質	長	寬	厚	形狀	重量	長	寬	厚	形狀	重量	長	寬	厚	形狀	重量
177	斧	石	17.2	9.0	2.0	扁平	1.05	5.0	5.4	0.5	5.45	111.927	11.245	11.245	11.245	11.245	11.245
178	斧	石	7.8	1.0	2.0	扁平	0.14	0.65	0.65	0.14	0.65	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
179	斧	石	25.3	16.7	2.0	扁平	0.14	0.78	0.78	0.14	0.78	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
180	刮削器	石	72.0	36.0	17.0	圓錐形	0.28	0.98	0.35	0.28	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
181	側面刮削器	石	30.2	25.2	5.5	圓錐形	0.24	0.98	0.52	0.24	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
182	刮削器	石	28.7	16.7	8.8	圓錐形	0.24	0.98	0.52	0.24	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
183	刮削器	石	71.9	17.0	2.0	扁平	0.14	0.78	0.78	0.14	0.78	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
184	刮削器	石	21.0	13.2	2.8	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
185	刮削器	石	25.1	21.4	5.9	圓錐形	0.24	0.98	0.52	0.24	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
186	刮削器	石	14.6	6.7	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
187	刮削器	石	16.2	11.5	2.9	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
188	刮削器	石	16.2	11.5	2.9	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
189	刮削器	石	22.0	17.5	2.0	扁平	0.24	0.98	0.52	0.24	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
190	刮削器	石	6.6	22.4	1.0	扁平	0.14	0.78	0.78	0.14	0.78	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
191	刮削器	石	10.0	16.8	2.0	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
192	刮削器	石	14.9	11.0	3.6	圓錐形	0.24	0.98	0.52	0.24	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
193	刮削器	石	21.0	11.0	3.6	圓錐形	0.24	0.98	0.52	0.24	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
194	刮削器	石	21.0	11.0	3.6	圓錐形	0.24	0.98	0.52	0.24	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
195	刮削器	石	11.6	11.6	1.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
196	刮削器	石	7.1	7.3	1.0	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
197	刮削器	石	13.4	18.2	4.5	圓錐形	0.24	0.98	0.52	0.24	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
198	刮削器	石	10.0	10.0	1.1	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
199	刮削器	石	15.9	16.9	5.9	圓錐形	0.24	0.98	0.52	0.24	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
200	刮削器	石	11.0	16.2	3.5	圓錐形	0.24	0.98	0.52	0.24	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
201	刮削器	石	11.0	16.2	3.5	圓錐形	0.24	0.98	0.52	0.24	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
202	刮削器	石	11.0	16.2	3.5	圓錐形	0.24	0.98	0.52	0.24	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
203	刮削器	石	8	47.4	2.3	扁平	0.05	0.28	0.28	0.05	0.28	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
204	刮削器	石	7.5	47.4	2.3	扁平	0.05	0.28	0.28	0.05	0.28	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
205	刮削器	石	21.5	12.1	2.9	扁平	0.05	0.28	0.28	0.05	0.28	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
206	刮削器	石	19.5	16.4	3.0	圓錐形	0.24	0.98	0.52	0.24	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
207	刮削器	石	15.5	45.7	4.5	圓錐形	0.24	0.98	0.52	0.24	0.98	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
208	刮削器	石	10.0	10.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
209	刮削器	石	17.5	12.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
210	刮削器	石	15.0	15.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
211	刮削器	石	17.5	12.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
212	刮削器	石	15.0	15.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
213	刮削器	石	21.5	12.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
214	刮削器	石	21.5	12.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
215	刮削器	石	17.5	12.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
216	刮削器	石	15.0	15.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
217	刮削器	石	15.0	15.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
218	刮削器	石	15.0	15.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
219	刮削器	石	15.0	15.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
220	刮削器	石	15.0	15.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
221	刮削器	石	15.0	15.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926
222	刮削器	石	15.0	15.0	2.3	扁平	0.14	0.56	0.56	0.14	0.56	112.023	11.926	11.926	11.926	11.926	11.926

報告書抄録

ふりがな	はいばらざわいせき						
書名	生茨沢遺跡						
副書名	平成10年度 東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告						
シリーズ番号	第114集						
編著者名	榎原千賀子 栗木 崇						
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL054-262-4261						
発行年月日	1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 道跡番号	北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
生茨沢	三島市竹倉 348	22206	35° 57' 20"	137° 55' 52"	1998年1月 1998年6月	3050m ²	東駿河湾環 状道路建設
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
生茨沢遺跡	古墳	古墳後期	横穴式石室	太刀、刀子、鉄鎌			
	集落	後期旧石器 時代初頭	石器ブロック	台形様石器、スク レイバー、楔形石 器、台石、剝片類	直径約8m円形 ブロック		

写 真 図 版

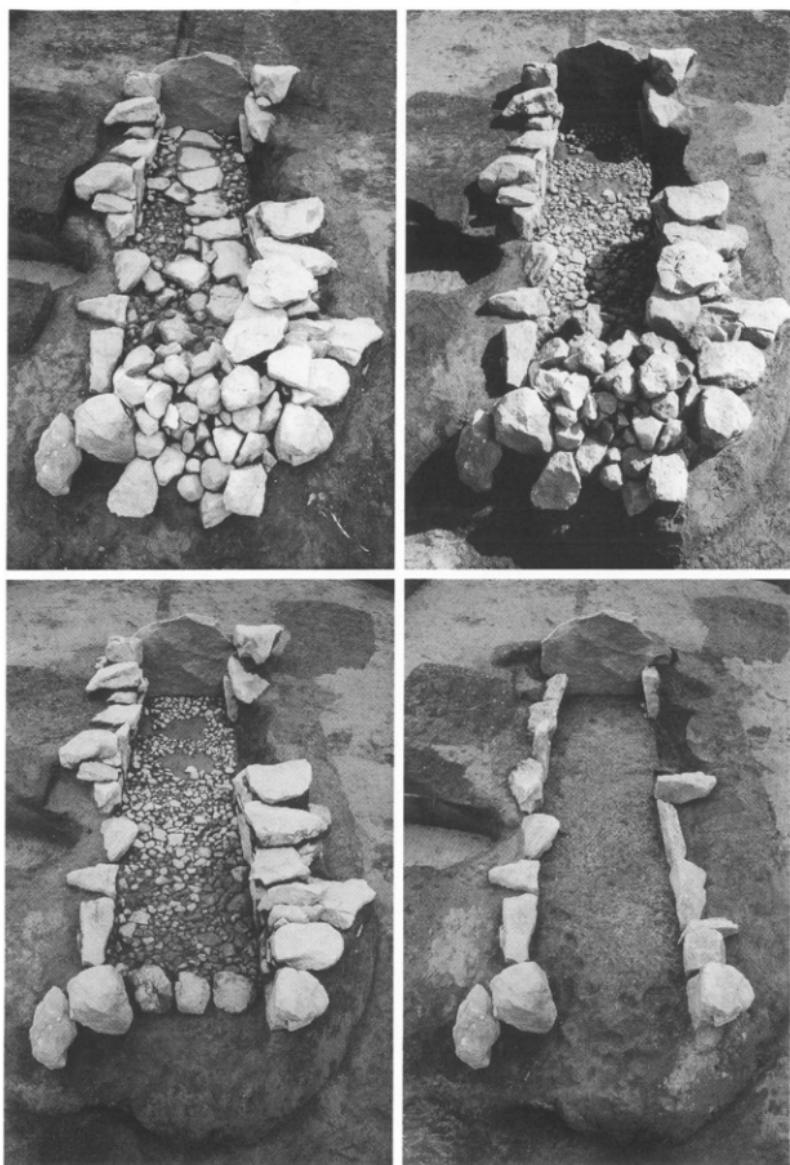
図版 1



調査区遠景

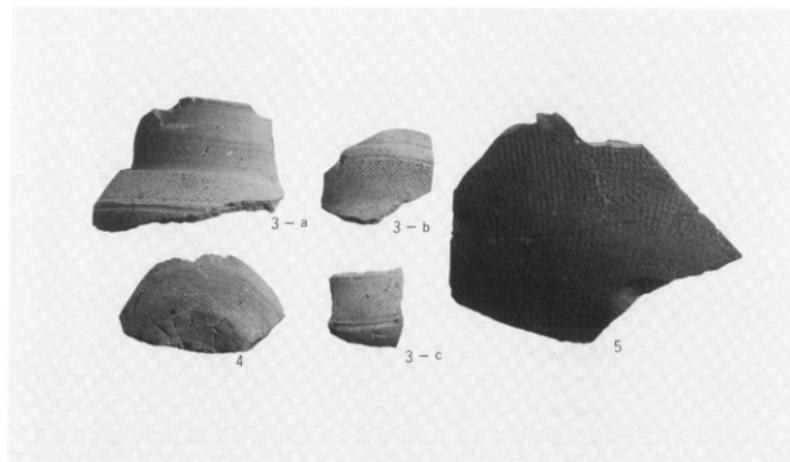


墓塚と周溝

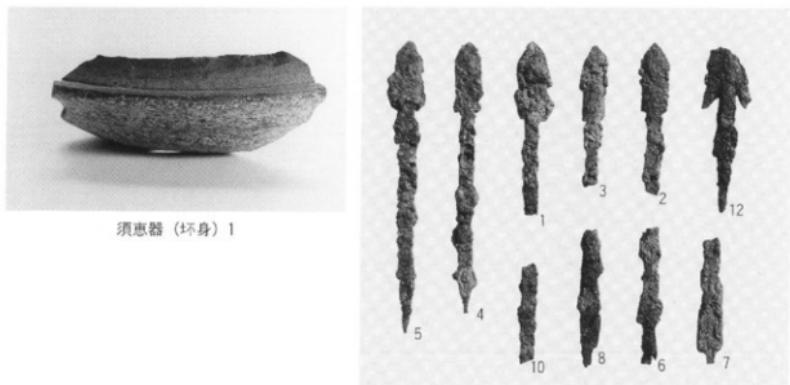


石室検出状況

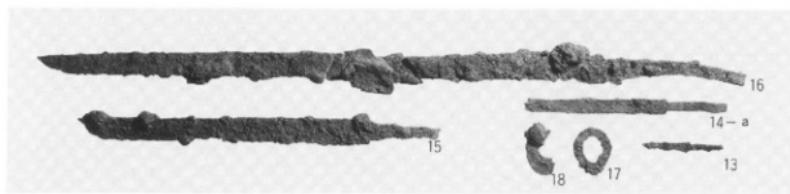
図版3



遺構外出土土器

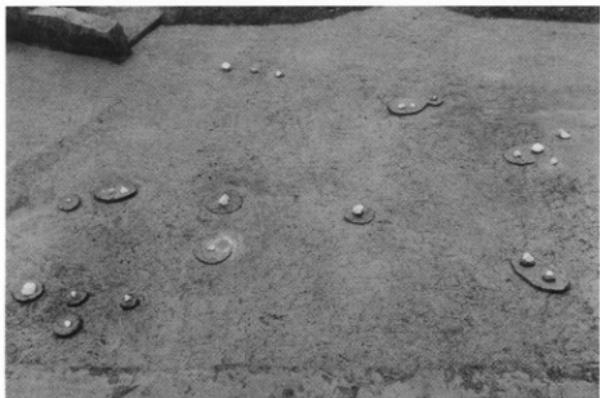


鉄鎌



刀子・小刀・太刀・鎌

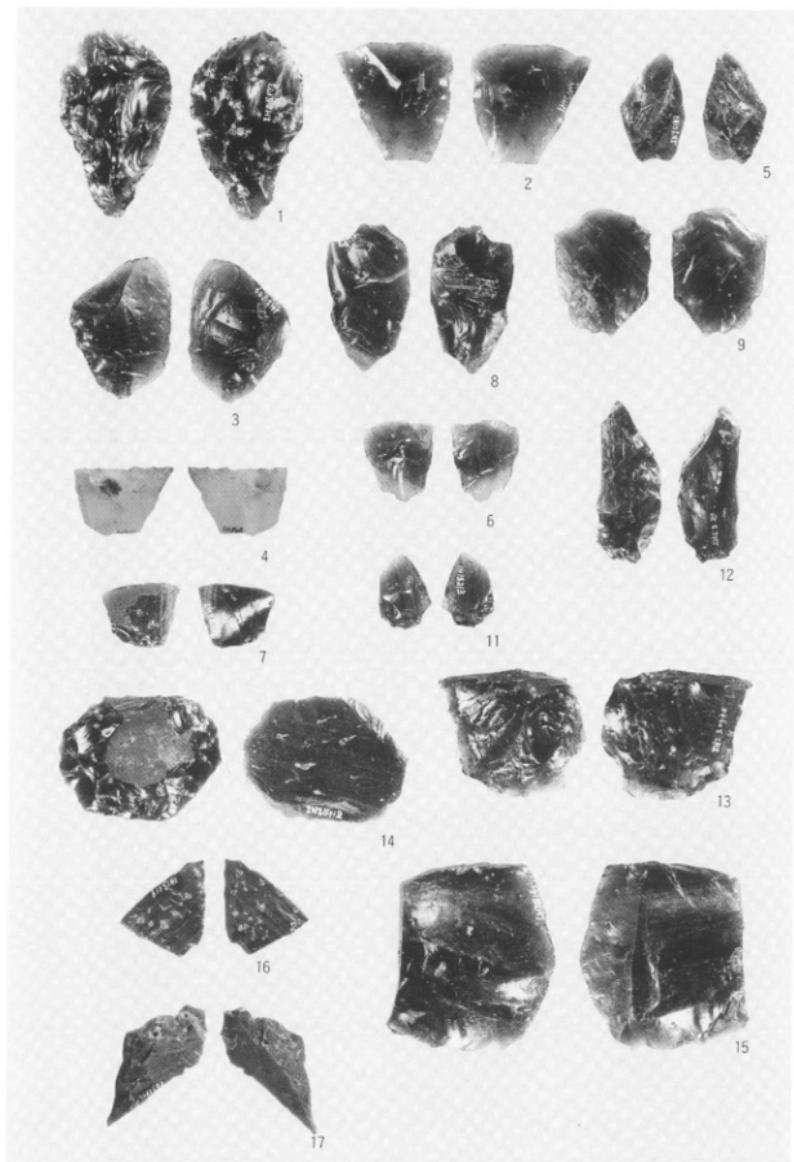
図版4



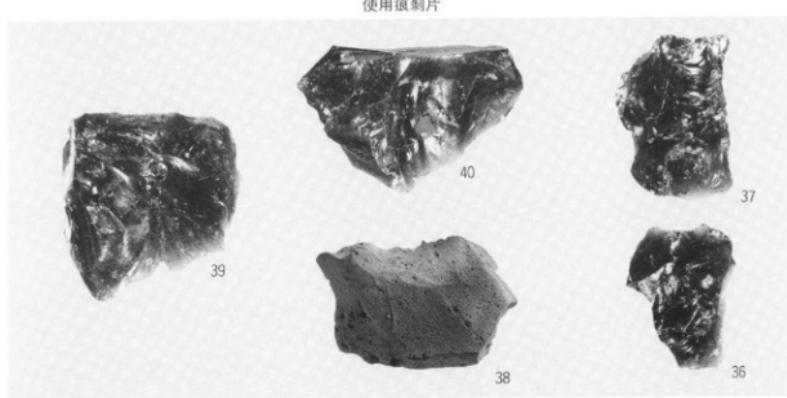
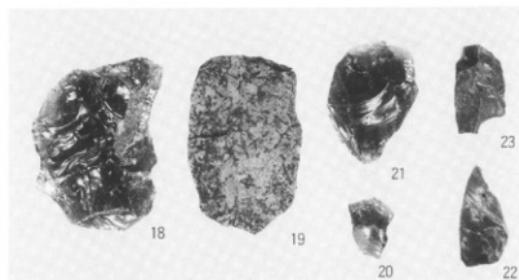
▼ 石器ブロック遠景



図版 5



台形様石器・スクレイパー



静岡県埋蔵文化財調査研究報告 第114集

生茨沢遺跡

平成10年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年3月31日

発行所 財團法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
TEL (054) 262-4261㈹

印刷所 黒船印刷株式会社
TEL (054) 286-0236㈹